



九州大学経済学部同窓会
 事務局 〒819-0395
 福岡市西区元岡744
 九州大学経済学部に
 TEL 092-802-5561 FAX 092-802-5560
 mail: dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp
 郵便振替 01750-6-21743

目次

令和4年度行事予定(総会のご案内) / 1

研究院長からのご挨拶 経済学研究院長 大石 桂一 / 2

事務局長からのご挨拶 同窓会事務局長 大坪 稔 / 3

支部だより

東京支部 事務局長 吉元 利行(昭和53年卒) / 3

関西支部 「聖徳太子」ゆかりの地を訪ねて
 副支部長 中野 光男(昭和50年卒) / 4

福岡支部

福岡支部交流ゴルフ会、第69回コンペを開催
 岡島 充亦(昭和59年卒) / 7

シンガポール コロナ禍駐在記
 大野 修(昭和58年卒) / 7

音楽の記憶から 米村 健史(昭和56年卒) / 8

追悼文

大屋祐雪先生を偲んで
 柴田 康之(昭和38年卒) / 10

大屋祐雪先生を偲んで
 法政大学名誉教授 森 博美(昭和45年卒) / 11

大屋先生と大屋ゼミと私
 嶋田 正明(昭和54年卒) / 12

田北先生、早過ぎるお別れです
 九州大学経済学研究院教授 藤井 美男
 (昭和55年卒・昭和58年博士入) / 13

特別寄稿

日本半導体産業の寿命
 ASA Microsystems Japan 株式会社代表取締役
 三輪 晴治(昭和35年卒) / 14

リレー随想

「まほろば」福岡 橋本 純夫(昭和47年卒) / 17
 追悼・秀村選三先生 森山 沾一(昭和44年卒) / 18
 恩師秀村選三先生 萩尾 明彦(昭和54年卒) / 19
 九大経済学部卒業19年目を迎えて
 岡元 勝彦(平成16年卒) / 21
 九大の生活を振り返って 新改 敬英(平成28年博士入) / 23
 コロナ禍の大学生活 平 安乃(令和3年卒) / 24
 向上心のある馬鹿 郭 秀嘉(経済経営学科3年) / 25

エッセイ～女性教員より

徳賀芳弘先生のご退職 経済学研究院准教授 潮崎 智美 / 26
 ミャンマー経済研究者としての想い
 経済学研究院准教授 水野 敦子 / 27

人物往来 ～退任

卒 辞 ～九大の自分史～ 藤井 美男 / 29
 九大45年間の思い出 深川 博史 / 30

同窓会歴代会長 / 32

同窓会からのご願い / 32

令和4年度行事予定(総会のご案内)

令和4年度の各支部総会を下記の通り予定しております。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内申し上げます。コロナウイルスの影響で変更が余儀なくされることを懸念しております。

令和4年度 関西支部総会

日時 令和4年5月21日(土) 15時～
 場所 ハートンホテル北梅田
 〈お問い合わせ先〉 福岡支部事務局 谷村 信彦
 TEL (090) 6678-6754
 E-mail nobuhikotanimural@gmail.com

令和4年度 東京支部総会

日時 令和4年7月7日(木) 18時～
 場所 学士会館 210号室
 (東京都千代田区神田錦町3-28 TEL(03)3292-5936)
 〈お問い合わせ先〉 東京支部事務局 吉元 利行
 TEL (090) 8877-9012
 E-mail t29yoshimoto@aol.com

令和4年度 全国・福岡支部合同総会

日時 令和4年6月27日(月) 18時～
 場所 西鉄グランドホテル
 (福岡市中央区大名2-6-60 TEL(092)771-7171)
 〈お問い合わせ先〉 福岡支部事務局 国生、高木
 公益財団法人九州経済調査協会内 TEL(092)721-4900
 E-mail soumu-02@kerc.or.jp

令和4年度 広島地区九大法・経同窓会総会

日時 令和4年11月 開催予定
 場所 未定

新型コロナウイルス感染拡大防止の為、変更・中止の可能性があります。出席希望の方はホームページでのご確認をお願いします。

研究院長からのご挨拶



経済学研究院長
大石 桂一氏
1990(平成2)年卒
1993(平成5)博士入

月日が経つのは早いもので、前回、同窓会報に経済学研究院長就任のご挨拶を執筆してから1年が経過いたしました。今回、再び執筆させていただくことになりましたが、2年の任期の中間点を迎え、この1年を振り返る良い機会を与えていただいたと感謝しております。

昨年度もまた、新型コロナウイルスへの対応に追われた1年でした。感染拡大と取束を繰り返す中で対応には苦慮しつつも、経済学部・学府は対面授業とオンライン授業のベスト・ミックスを追求してまいりました。八木信一教授をヘッドとする「オンライン化特設チーム」の献身的な努力と授業を担当する各教員の真摯な取り組みにより、引き続き質の高い教育を提供できたものと自負しております。

2018年4月にスタートした「経済学部グローバル・ディプロマ・プログラム（通称GProE）」は、2021年度に4名の最初の修了生を送り出しました。2年次進級時に選抜を行い、短期語学留学・長期交換留学・外国語での卒業論文などを課すことでグローバル人材の育成を目指すこのプログラムには、第1期生として10名が在籍しておりましたが、新型コロナウイルスの関係で必修の長期交換留学が叶わず修了を断念した者や、渡航が遅れたため現在留学中の者などもあり、1期生全員に2021年度にディプロマを授与できなかったことは残念でありませんが、高い志をもったグローバル人材が世界に羽ばたいていくのを見送ることができて、安堵しております。

新型コロナウイルスの世界的な感染拡大を受けて、2021年度当初は2020年度に引き続き文部科学省は学生の海外留学を原則として認めておりませんでした。それが突如、2021年6月に文部科学大臣が会見で大学間交流協定等に基づく派遣を容認する旨を表明しました。しかしながら、九州大学本部は依然として学生の海外派遣に慎重な姿勢を崩しませんでした。そこで、信念と覚悟をもち、リスクを十分に

認識したうえでそれに備え、自覚ある大人として行動できる学生については、経済学部長としてそのことを確認したうえで責任をもって送り出すので、海外留学の希望を叶えてほしいと大学本部に申し入れ、厳しい交渉を重ねた結果、GProE第1期生および第2期生から5名を留学させることができました。また、長期交換留学ができない学生のための代替措置としていくつかの英語開講科目も設置しました。来年度はさらに多くの学生がディプロマを取得できるものと期待しております。

それ以外にも、経済学部・学府は様々な新たな取組みを進めております。2018年4月に始動した「文系4学部副専攻プログラム」でも経済学部から7名の最初の修了生を輩出いたしました。これからも確固たる経済学の専門性と幅広い教養を併せもった人材を育成してまいります。

大学院では、シンガポール・マネジメント大学会計学研究科と部局間交流協定を新たに締結しました。2022年度から修士課程大学院生の相互派遣を開始いたします。また、数学博士人材を育成する、九州大学の5年間の修士博士一貫プログラムである「マス・フォア・イノベーション卓越大学院プログラム」は2022年度から「マス・フォア・イノベーション連係学府」に改組されます。経済学府経済工学専攻は数理学府およびシステム情報科学府とともに、引き続きその一翼を担ってまいります。

社会人教育に関しては、産業マネジメント専攻(九州大学ビジネス・スクール：QBS)に、芸術工学府、九州大学ロバート・ファン／アントレプレナーシップ・センター(QREC)、およびQBSの3者が連携して教育を行う「デザイン×ビジネス×アントレプレナーシップ専修トラック(DBEX)」を設置しました。さらに、これまで科学技術イノベーション政策教育研究センター(CSTIPS)が実施してきた「科学技術イノベーション(STI)政策専修コース」は2022年度から「履修証明プログラム」に衣替えされ、エビデンスに基づいて科学技術イノベーション政策を立案・実行できる高度専門人材の育成を経済学府が責任部局として担うことになりました。

このように、経済学部・学府・研究院は次々と新しいことに取り組んでおります。一方で、2024年には経済学部の前身にあたる九州帝国大学法文学部経

済学科の創設から100年を迎えます。この良き伝統を守りつつ、次の100年に向けて変革に果敢にチャレンジしてまいる所存です。

九州大学は2021年に指定国立大学法人の指定を受け、2022年度から国立大学は第4期中期目標・中期計画期間に入ります。そうした中、九州大学のミッ

ションを達成し、さらに発展していくうえで、九州大学本部および社会からの経済学研究院に対する期待は高まる一方です。私たちは、そのような期待に応えるべく、なお一層、尽力してまいりますので、同窓会の皆様におかれましては、どうか今後ともご支援をたまわりますよう、お願い申し上げます。

令和4（2022）年度入学式 新入生324名 令和3（2021）年度卒業式 卒業生327名



同窓会事務局長
大坪 稔氏
1995(平成7)年卒
1997(平成9)博士入

3月23日（水）に、西鉄グランドホテルで開催を予定しておりました経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業記念祝賀会は、新型コロナウイルス感染拡大への懸念から、今年もやむなく中止となりました。

経済学部卒業生は238名で、うち経済・経営学科151名、経済工学科87名でした。経済学府修士課程修了生は89名で、うち経済工学専攻16名、経済システム専攻24名、産業マネジメント専攻49名です。若手研究者への研究支援や学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与が、以下の通り行われました。

修士論文・プロジェクト論文

- | | |
|--------------|-----------------|
| (1) 経済工学専攻 | 楊 開華
尤 舒怡 |
| (2) 経済システム専攻 | 阪口 真生志
伊藤 朱里 |

- | | |
|----------------|-----------------|
| (3) 産業マネジメント専攻 | 佐藤 愛桔
宮田 和三郎 |
| 成績優秀者 | |
| (1) 経済・経営学科 | 藤津 啓祐
今泉 緑 |
| (2) 経済工学科 | 楠田 健太 |

昨年度は、新型コロナの影響を受けつつも、各支部の皆様方をはじめ大勢の方々のご協力を仰ぎ、一年間の活動と行事を終えることができました。関係する皆様方には心よりお礼申し上げます。また、前事務局長の藤井美男先生が3月に九州大学を退職され、さみしさ・心細さを感じると同時に、これまで8年にわたって事務局長として精力的に同窓会活動にかかわってこられましたこと、深くお礼申し上げます。

当同窓会は、引き続き財政問題の解決という課題を抱えておりますが、今後も貫 正義会長を先頭に、同窓会活動のさらなる充実・発展を図ってまいりますので、各支部同窓会役員の方々ならびに同窓生の皆様方へ一層のご協力をお願い申し上げ、新年度のあいさつとさせていただきます。

支部だより

東京支部

1. 2021年秋以降の活動

昨年7月7日の東京支部総会、8月末の九大東京

同窓会ともに、オンライン開催になり、以降も、コロナ禍による多人数での会合等が制限されたため、東京支部としての活動はできませんでした。

2. 東京支部理事会

今年初めての東京支部の理事会は、3月2日（水）午後6時半から有楽町の九大東京オフィスに集合した支部長以下理事9名と自宅や会社からオンライン参加の理事7名で開催し、新卒者歓迎会の開催、総会準備等について協議しました。

新卒歓迎会については、4月9日(土)午後3時から有楽町の東京オフィスとオンライン併用で開催することとし、竹之下理事、水田理事、青柳理事などの若手理事を中心に、企画・運営を行うこととしました。なお、3月の卒業祝賀会に、開催告知のため、若手理事を派遣する予定でしたが、中止になったため学部の学位記授与式に派遣することとしました。

また、総会については、2年間リアルな総会が開催されていないため、今年こそ学生会館での開催を期待して、開催案内の作成や連絡手段の確認、記念講演の講師、企画内容を協議しました。その結果、今年の記念講演は、鷲崎俊太郎准教授の「築地から見える都市経済史…江戸・東京の今昔比較」に決まりました。

なお、今回で5年間支部長を務められた秦喜秋支部長が退任され、新しく伊東信一郎さん(昭和49年卒。ANAホールディングス前会長)が支部長に就任することを内定しました。また、これに合わせて、役員交代を内定しました。

3. 事務局長の独り言

2020年1月以降新型コロナウイルスによる感染拡大が周期的に発生し、多人数が集まって開催する同窓会企画の計画が困難になっていることは周知のとおりです。たくさんの企画が中止になったこととします。

しかし、企業では、ZoomやTeams、Skypeなどといった「オンライン会議」「Web会議」「ビデオ会議」ツールを使って、出社しなくてもコミュニケーションできる手段が活用され事業継続が図られています。また、研修、セミナー、勉強会などのイベントについては、ビデオウェビナーなどを使って、オンラインで実施しています。特に営業活動では、既存顧客やセミナー等の参加者向けに、メールで予約を取り付け、オンライン会議システムで提案内容を説明し、合意した内容は電子署名による電子契約を締結するなど、これまでと異なる活動に変化しています。

ビデオウェビナーは、通常のミーティング形式と異なり、主催者や登壇者のみが表示され、講演や意見交換に最大10,000人まで参加ができます。私自身もセミナーで、ビデオウェビナーを利用していますが、参加者の顔と音声は利用できない代わりに、チャットやQ&A機能を使って、参加者から質問できる機能がありますので、質疑応答として活用でき、講演途中で回答したり、補足することができるなど

対面式のセミナーより、充実した内容の講演となるのが多いことを実感しています。また、セミナーの様子をYoutubeLiveやFacebookLiveにストーリーミング配信もできます。

これらの機能を有効活用すれば、同窓会活動も、開催時間の制約、参加のための距離的制約から開放され、大人数による講演視聴ができ、海外からも参加が可能です。実際、昨年開催したオンラインでの七夕総会や東京同窓会のSummer Festaでは、香港、シンガポール、ロンドン、ケニアなどから同窓生の現地レポートを交えた企画を実施するとともに、全国各地からの参加もありました。また、対面開催のテーブルごとのスピーチに代えて、ブレイクアウトルームに分かれた少人数での交流も複数回できました。

オンライン開催は、対面での交流には、どうしてもかなわない面がありますが、コロナ禍などの社会活動の制約が今後も考えられる中、デジタル化していく社会に対応して、創意工夫した同窓会活動を探っていきたいと思います。

【東京支部事務局長 吉元 利行 昭和53年卒】
(九大東京同窓会事務局次長)

関西支部

新型コロナウイルス感染拡大の影響で、昨年は予定していた行事がすべて中止となりました。今年の関西支部総会は、5月21日(土)、ハートンホテル北梅田にて開催を予定しております。無事に開催できるよう願っております。

.....

「聖徳太子」ゆかりの地を訪ねて

関西支部副支部長
中野 光男氏
1975(昭和50)年卒

令和4(2022)年は聖徳太子(574-622年)が亡くなられて1400年目に当たる。聖徳太子の御廟所がある叡福寺(大阪府太子町)では昨年4月から5月にかけて「聖徳太子1400年御遠忌大法会」が行われた。聖徳太子が建立した四天王寺(大阪市)でも昨年10月から始まった「聖徳太子1400年御聖忌慶賀大法会」が今年4月まで行われる。また、奈良国立博物館では昨年4月から6月にかけて1400年遠忌記念

特別展「聖徳太子と法隆寺」が開催され、法隆寺の寺宝を中心に、太子の肖像や遺品と伝わる宝物が展示されていた。大阪市立美術館でも、昨年9月から10月にかけて、同様の特別展「聖徳太子 日出づる処の天子」が開催された。

聖徳太子(以下、「太子」ともいう)ゆかりの地と言えば何と言ってもまず、1993年にユネスコの世界文化遺産に日本で初めて登録された世界最古の木造建築群「法隆寺」である。斑鳩文化財センター「聖徳太子の足跡」によると、「法隆寺は斑鳩寺ともいわれ、その創建については、金堂に安置されている薬師如来像の光背銘に、太子の父である用明天皇が自らの病氣平癒を願い、造寺造仏を發願されたが、平癒することなく崩御したことから、推古天皇と太子はその願いを成就するため、607年に創建したとする由来が記されている」。ところが、「日本書紀には法隆寺(当時は斑鳩寺)の創建の記事はなく、天智天皇の時代の670年に焼失したという記事はある。ただし、その後再建したという記事はない」(高田良信法隆寺執事長「法隆寺の秘話」)。こうした記事を巡り、いわゆる「法隆寺再建・非再建論争」が明治時代から繰り返されてきたというが、それにしても創建当時の仏像が焼けずにたくさん残っているのは驚く。

法隆寺はJR法隆寺駅から北へ歩いて約20分で国宝の南大門に着く。昨年12月上旬に訪ねたが、相変わらず修学旅行の小学生が多い。法隆寺は金堂と五重塔がある西院伽藍と、夢殿を中心とする東院伽藍に分かれるが、建造物と美術工芸品を合わせ39件もの国宝を擁する(そのうち14件は1951年の第1回指定の国宝である)。「釈迦三尊像」や「観世音菩薩立像」などの仏像や工芸品の「玉蟲厨子」など、教科書に出てくる国宝にお目にかかる。また、東院伽藍の東に隣接する中宮寺は、聖徳太子の母である穴穂部間人(あなほべのみひと)皇后のために建立された尼寺であり、ここにも第1回指定の国宝「菩薩半跏像」がある。また、法隆寺から東北に15分くらい歩いていくと、太子の息子の山背大兄王らの創建

と伝わる法輪寺・三重塔があり、さらに東に5分ほど歩くと法隆寺の47棟の建物とともに世界遺産に登録された法起寺(ルーツは太子が法華経を講じた岡本宮で、山背大兄王に遺命して寺院にしたもの)と三重塔(これも国宝)がある。

次は、593年に建立されたと伝わる四天王寺。近くには通天閣やあべのハルカスなどの名所がある。そもそも、太子が建立した寺院は、日本書紀の記述では四天王寺のみである。四天王寺と言えば、関西支部が平成29年5月の見学会「四天王寺界限」で訪れた(同窓会報63号所収。残念ながら私は参加できなかったが、たまたま高校の同窓会も令和元年11月に四天王寺見学を企画したので参加した)。JR天王寺(地下鉄天王寺・近鉄安倍野橋)駅より北へ歩いて12~14分で西の門「石の鳥居」に着く。そして、南に回って南大門から中門(仁王門)へと入ると、目の前に五重塔が現れる。四天王寺では、南から北に向かって中門・五重塔・金堂・講堂といった主要な堂宇が一直線に並び、それを回廊が囲む建築様式「四天王寺式伽藍」が見られるので有名である。

さて、四天王寺は、日本書紀推古元年(593年)条に、「四天王寺を難波(なにわ)の荒陵(あらはか)に造る」と書かれている。荒陵とは、大阪市天王寺区の四天王寺付近。ところが、四天王寺縁起などは、587年にいったん難波の玉造の岸に創建し、593年に荒陵に移建したと伝える。四天王寺の発掘調査と出土瓦の研究によれば、飛鳥寺や斑鳩寺より時期が新しい(吉村武彦『聖徳太子』岩波書店)。なお、移建説



上之太子駅前の太子像



法隆寺・五重塔



法隆寺・夢殿



法隆寺西院伽藍(中門と五重塔)



法輪寺・三重塔

は四天王寺縁起の研究者・榊原史子氏の著作にも見られる。しかし、「玉造において、寺の遺跡は発見されていない」(『聖徳太子の真実』大山誠一編、平凡社刊の中の「四天王寺縁起」の成立)。それに関して思い出すのは、平成27年11月関西支部の野外勉強会「大河ドラマ「真田丸」の舞台大阪城激戦地巡り」(同窓会報61号所収)の最終見学地、「鶴森宮(かささぎもりのみや)」(大阪市中央区森の宮)での話。その由緒書には「589年、聖徳太子は物部守屋との戦いに必勝を祈願され、勝った暁には四天王像を造ることを誓われた。その戦いに勝利され、太子は四天王像を造り、この森に元四天王寺を創建なされたのです」とある。移建説と関係あるのかどうか、専門家でも関係者でもないのわからないが、気になることではある。

最後にもう一つ、聖徳太子の墓があるとされる磯長山(しながさん)・叡福寺(大阪府南河内郡太子町)。近鉄南大阪線上ノ太子駅からバスで8分、帰りは下りが多いので歩いて25分くらい。「推古30年(622年)太子が49歳で薨去すると、前日に亡くなった妃・膳部大郎女(かしわべのおおいらめ)と



四天王寺・南大門



四天王寺・西の参道の石鳥居

2か月前に亡くなった母・穴穂部間人皇后とともに、太子が自らの廟所として生前に選定した磯長廟に埋葬された。叡福寺は、太子の御廟を守護するために推古天皇によって建立され、奈良時代に聖武天皇が大伽藍を整備したと伝えられる。四天王寺・法隆寺と並ぶ太子信仰の中核となり、太子を敬う空海や親鸞、叡尊、日蓮なども参籠した」(『たずねる・わかる聖徳太子』2020年刊、淡交社)。なお、近くには用明天皇陵や推古天皇陵、敏達天皇陵、孝徳天皇陵などもある。天皇陵や古墳好きにはもってこいの場所である。



鶴森宮

ちなみに、太子町というところが、兵庫県揖保郡にもあり、そこに「斑鳩寺」がある。「推古14年(606年)、太子が推古天皇に法華経の講義をしたときに、播磨国揖保郡の土地を賜り、それをそのまま法隆寺に施入、その地に伽藍を建立したのが始まりと伝わる」(既出『たずねる・わかる聖徳太子』)。

ところで、我々の知っている聖徳太子と言えば、1万円札などお札の肖像になった人物であり、蘇我馬子とともに仏教を広めた人、「和をもって貴しとし」で始まる17条憲法を制定した人、小野妹子を遣隋使として派遣、「日出ずる処の天子、書を日没する処の天子にいたす、恙なきや」の国書で中国(当時、隋)と対等の外交姿勢を示した人である。しかし、日本古代史の研究者の間では、「厩戸王子(うまやとのみこ)は実在したが、聖徳太子は実在しなかった」という論調が多い。確かに720年に編纂された日本書紀には聖徳太子の名前はない。それでも聖徳太子は、日本の歴史・文化を象徴する人物であり、信仰の対象として現在も生き続けている。

コロナ禍の影響で旅行など行動制限は避けられませんが、関西・近畿2府4県には太子ゆかりの地がたくさんありますので、是非訪ねてみてはいかがでしょうか。



四天王寺・五重塔



四天王寺(金堂・五重塔の先にあべのハルカスが見える)



叡福寺・聖徳太子御廟所



叡福寺・宝塔

福岡支部

福岡支部交流ゴルフ会、第69回コンペを開催 ～11月21日(日)伊都ゴルフ倶楽部



日本生命保険相互会社
長崎支社 法人職域担当部長

岡島 充亦氏

1984(昭和59)年卒

令和3年11月の「第69回ゴルフ会」において優勝した、岡島充亦(S59年卒)

です。現在日本生命保険相互会社に勤務しており、長崎県佐世保市に単身赴任中です。当ゴルフ会は、勤務先の先輩でもある田中宏樹さん(S57年卒)からお誘いをいただき参加したのがきっかけです。初参加の時はいきなり貫正義会長と同組となり、また地元経済界をリードする企業でマスコミにも登場される諸先輩方もおられ大変緊張したのを覚えています。

今回は、新型コロナウイルス感染症の間隙を縫うような形で何とか開催でき、個人的にも直前に還暦を迎えて初のプレーで感慨深いものがあります。

同伴メンバーは白水清隆さん(S63年卒)、三浦剛さん(H3年卒)、吉村雄大さん(H3年卒)で、白水さんはこれまでの表彰式で何度も名司会ぶりを拝見し、三浦さんはご出身が長崎で私の会社の後輩と同窓(三浦さんが先輩)で家にも遊びに行く仲、吉村さんは私と自宅がほんの数メートルの距離と、いろいろご縁があることがわかりました。

プレーの方はインコースからのスタートで何故かよくバンカーにつかまり、前半はトリプル1・ダボ3・ボギー3・パー2の48で下手をすると100オーバーかもとテンションが下がった中、後半スタートホール第2打が打った瞬間「よしグリーンオン!」の手応え・・・からのイレギュラーバウンドで左バンカーへ、カットとなって打った球がワンパット圏内に入りパーセーブすることができました。

ここからが、アニメーションで言うところの「暴走モード」に入り、最終ホールを残したところで後半ボギー2の2オーバー!しかし、最終ホールはいつもの詰めの甘さが出てダボをたたきました。トータル88で抑えることができました。

当日は表彰式がなかったため、後日事務局よりメールをいただき優勝を知りました。同伴のメンバー

と、大波賞クラスの出入りの激しいスコアに助けられたと思います。

最後に、この原稿を書いている令和4年1月はオミクロン株の感染拡大により全国的に「まん延防止等重点措置」が発出されています。次回5月の70回大会が節目の大会に相応しく、盛大に行われることを祈っております。

シンガポール コロナ禍駐在記

三菱重工 執行役員
アジア・パシフィック総代表 兼 インド総代表 兼
Mitsubishi Heavy Industries Asia Pacific Pte. Ltd. 社長

大野 修氏

1983(昭和58)年卒

コロナ禍の中、シンガポールで二度目の新年を迎えました。昨年に続き雨模様の暖かい新年でした。北緯1度のこの地では本当に季節感を失くしてしまっています。

新年を迎える気持ちの切り替えにと日本人墓地へ墓参致しました。そこは閑静な住宅地の中の手入れされた公園のような場所で、1909年シンガポールで茶毘に付された二葉亭四迷の記念碑や、軍人さんのお墓に交じってからゆきさんたちの小さな墓標が立ち並んでいました。一番古いお墓も長崎出身のからゆきさんのお墓でした。日本に帰国して墓参できない慰めにここでお参りをして気を紛らわせました。

1月19日には、日本ゴルフツアーの初戦であるSMBCシンガポールオープンの前日に実施されたプロアマトーナメントに、自らの腕前も顧みず参加させて頂き、内藤寛太郎プロと一緒に回らせて頂きました。プロの圧倒的飛距離と精度、2イーグル、1バーディに感嘆させられましたが、ちゃんと指導をして頂き、たいへん有意義で記憶に残るものとな



右から2番目が筆者、3番目が内藤寛太郎プロ。

りました。内藤プロは残念ながら予選落ちとなりましたが。

2020年4月に、フィリピンからシンガポールに赴任しましたが、コロナ禍の始まりで最初の入国時の隔離検疫で空港から指定のホテルへ直送され14日間の缶詰生活。ホテル内は自由に動けると思っていたが、部屋から一歩も出れず決まった食事と面白くないテレビ、窓も開かず湯舟も無い部屋はまさしく独房でした。毎日保健省からの確認メールと電話、この徹底ぶりは大したもんだと感心しました。14日の懲役を終え出所した翌日から全土ロックダウン、住むところを決めていたので良かったのですが、店はすべて閉まり、持ってきたスーツケース1個での生活。スーパーの食料品売り場だけ開いてましたので、自炊と在宅勤務、あとは運動のためひたすら歩く生活がほぼ3か月。夢見てたシンガポール生活は本当に夢になりました。

8月に入り、規制も緩和され始めレストランも開き始め、ようやくタイガービールを外で飲めるようになり散歩できるようになりました。Fine Country シンガポール。素敵な国と思っていましたら、罰金のFineでした。地下鉄内での飲食4万円、喫煙8万円、危険物持ち込み40万円、ドリアン持ち込みは禁止ですが罰金は無し。屋外でのハトへの餌やり6万4千円。本当に厳しいです。コロナ規制の屋外での飲食や集合人数オーバーもすぐ取り締まられますし、外国人は強制退去、会社ごとVISA発給禁止にまで至ります。強制送還された外国人は100人近くになると聞いています。監視カメラの数は世界一、通報制度有り、明るい北朝鮮と言われる所以でもあります。この規制の厳しさは、建国の父リークワンユーが、占領時の日本の残虐とも言われる規律の厳しさから学んだと自伝で書いていました。東南アジアでは日本との戦争の話は避けられませんが、シンガポールの市街戦を回避して降伏した英豪軍の決定



マーライオンとマリーナベイ・サンズ

は正しかったと感じました。

周辺国への出張や日本への帰国はなかなか実現できず、週末の楽しみは上達しないゴルフです。コロナ前は皆さんインドネシアやマレーシアの安い所に行っていたらしいのですが、それがシンガポール国内に殺到してますので予約が取れません。ウェブ予約だと開始1分以内にすべて埋まります。ウォークインという受付まで出向いて予約する方法がありますが、朝3時半起き、7時まで待ってようやく予約できるような状況です。3回やりましたが、もういいです。

こちらには松薫会という九大同窓会がありましたので、早速入れて頂きました。全学の同窓会ですので理系、文系合同の50名強の会ですが、コロナ禍で5人までしか集まれませんので、プチ同窓会を一度やっただけです。集会解禁の暁には、「松原に」を絶唱しようと思います。

日本もまだ感染が続いてる状況ですが、ワクチン証明ができるようになれば是非ご訪星ください。大歓迎させていただきます。心よりお待ちしております。(2022年1月吉日)

.....

音楽の記憶から



山九株式会社
プラント事業部 機材部 参与
米村 健史氏
1981(昭和56)年卒

今回の投稿は2回目である。今回は10年前の平成22年の第48号だった。しばしお付き合いを。

(1) 中学時代

私は、中学時代の前半を大阪府吹田市の某私立中学校で過ごした。しかも、今まで自分が聴いていた歌謡曲と違い「Chicago」「Beatles」「ローリングストーンズ」等の話題ばかり。しかし、すぐにその虜になった。

中学2年で、親の転勤に伴い広島市の公立中学校へ転校した。

この頃になるとレコードでは、満足できず、コンサートに行きたい衝動にかられた。そのような中、1971年9月に「レッドツェッペリン」が広島市でコンサートをするというニュースがあり、行きたいと思った。しかし当時、コンサートに行く＝補導であり、出かける勇気はなかった。

ロックバンドは、素行不良と言われていたが、「レッドツェッペリンが、広島コンサートの売上金700万円を原爆被災者に寄付した」という地元新聞記事に私は目を奪われた。彼らのチャリティーの精神は、中学生の私にとっては驚きであった。

(2) 高校時代～大学時代

高校時代は、引き続きロック少年であったが、LPレコードは当時2300円から4000円前後(2枚組)であり、容易に購入は難しく音源はFMラジオであった。

さて、コンサートに初めて行ったのは、福岡の予備校時代であった。「レインボー」という「Deep Purple」の元メンバーが作ったバンドだ。場所は九電記念体育館、今は高級マンションが建ち並ぶ。

大学では、教養部時代の木造2階建てクラブ部室の軽音楽部ジャズ研究会のRhythm Societyの調べが印象に残っている。ジャズをはじめ様々な曲が自然と耳に入り、所属のワングル部室での会議最中でも、私自身は軽快な音に戯れた。のちに知ることになるが、直木賞作家の「原泉」や故人となったジャズピアニストの「辛島文雄」もこのクラブから巣立っていったとのことである。

(3) 会社員時代

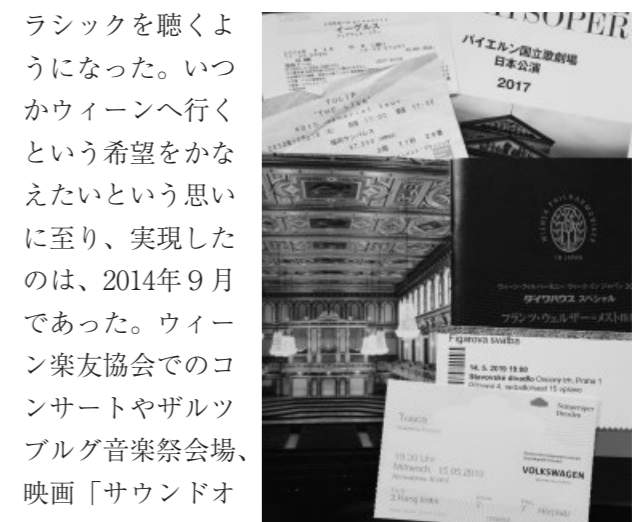
1985年5月に「Queen」の日本武道館のコンサートを楽しんだ。オリジナルメンバーの最後の日本ツアーでもあった。その他では、憧れの「レッドツェッペリン」のロバートプラント(ボーカル)とジミーペイジ(ギター)とその仲間の1996年2月のコンサートを挙げたい。

再び福岡に異動し、2004年「イーグルス」と2005年「クイーン&ポールロジャース」の福岡ドームのコンサートに、20代へ戻った気分になった。彼らも50代から6代になっていたが、2時間続けて演奏する元気があるのは驚きであった。

ビックネームも、このころになると鬼籍に入る人が多くなり、コンサート自体が不可能になってきた。そのような中で比較的熱心に聴いたのは、「北山修」・・・元フォーククルセダーズのメンバーにして九州大学教育学部教授(現名誉教授)・・・の曲であった。2010年医学部100周年ホールでの「さよならコンサート」やゼップ福岡でのコンサートは夫婦で楽しんだ。北山氏が作詞、教え子が作曲の九大伊都キャンパスにちなんだ曲『愛し伊都の国』も聴けた。

(4) クラシックとの出会い

40代の後半、チャイコフスキーの交響曲5番に雷を打たれた様な衝撃を覚え、これをきっかけにク



写真は、ここ20年のいくつかのチケットやパンフ。

ラシックを聴くようになった。いつかウィーンへ行くという希望をかなえたいという思いに至り、実現したのは、2014年9月であった。ウィーン楽友協会でのコンサートやザルツブルグ音楽祭会場、映画「サウンドオブミュージック」のマリアが結婚式を挙げた教会を楽しんだ。

2017年9月にバイエルン国立歌劇場が来日するとニュースが流れ、上京して『タンホイザー』を堪能、2018年は大阪フェスティバルホールでの「ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の演奏する調べに、鳥肌が立つのを感じた。

2019年、チェコのプラハ春の音楽祭とドレスデン音楽祭ツアーに参加した。チェコの国民的英雄スメタナ誕生日から始まる行事で、市民劇場でのコンサート、プラハ城ではロブコヴィッツ卿所有のベートーベン『交響曲三番英雄』の楽譜見学等、演奏以外の楽しみもあるツアーであった。ドレスデンでは、文化会館のコンサートとゼンパー・オーパーでのオペラ『トスカ』を堪能した。

2020年は特筆すべき年であった。コロナ禍の影響で「ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団」の来日がコンサート開催日ギリギリで決まった。私は、北九州市のコンサートに出かけた。1956年に初来日して、当時の八幡製鉄所大谷体育館で演奏して以来64年ぶりだそう。久しぶりの拍手、団員も目頭が熱くなっていた。魂がこもった演奏で一生忘れない思い出となった。

「歴史はそのまま繰り返さないがしばしば韻を踏む」というのは、作家マーク・トウェインの有名な言葉だそうである。今のウクライナ侵攻、様々な不祥事、私が生まれて64年でも蛮行が、繰り返されている。そのような中、音楽は、常に皆へ希望や勇気を届けてくれる。著名な演奏家ではなくても、「駅ピアノ」の行きずりの奏者でもそれは変わらないと思う。

追悼 大屋祐雪先生を偲んで

大屋祐雪先生を偲んで

柴田 康之氏

1963(昭和38)年卒



もう60年も前の事になってしまいました。昭和37年(1962年)大屋先生が九大に来られてすぐに始められた「統計学ゼミナール」(統計ゼミ)の

最初のゼミ生として、同期の佐野彦彦君と川田隆夫君と三人で参加しました。三人だけの(永遠の)一期生です。

人数が少なかったので教室に行くまでもなく、大学の先生の研究室で勉強した事が多かったように記憶しています。後年同窓会報(令和元年11月号)で知ったのですが、そこは高橋正雄先生の研究室で先生はご多忙で上京されて留守が多く、赴任直後の大屋先生に使っても構わないと言われて使っておられたのだそうです。

三人で先生のご自宅に呼ばれて、奥様の美味しい手料理を頂いたことも忘れられません。

でも不思議な事に先生とのお付き合いは、学生時代よりも社会に出てからの記憶の方が多く、より密着してお会いしていたかと思います。米国在任中には奥様とご一緒に海外旅行された折にお会いしたことも忘れられない出来事です。帰国後の東京勤務時代には先生が上京されるたびにゼミ生後輩の伊香賀君たちが統計ゼミOB会を設営していたので、都合のつく限り出席して先生にお目にかかりお話を伺いました。

私が定年退職後に福岡に戻ってくると、後輩の嶋田君が中心になって統計ゼミOB会が設営されました。私はこの会合には毎回参加し、そこでも必ず奥様とご一緒に参加されておられた先生にお会い致しました。会合の後嶋田君たちと先生をお送りしてお宅まで押し掛けたこともありました。又時には先生ご夫妻とあの懐かしき「くじゅうの九大の山の家」に合宿旅行をしたり、大学移転後もまだ箱崎に残っていた三畏閣で、あの名物のすき焼きを食べながら騒いだことなど忘れられない思い出です。

お会いしていつも先生に驚かされたのは、そのような会合の席で必ず先生がお話になることが常

に新鮮で示唆に飛んでおり、考えさせられるようなテーマだったことです。在学中よりもこの統計ゼミOB会で伺った先生のお話から教えられることの方が多かったのではないかと、こっそり思っています。

先生の話されたことで今でも覚えているのは、「大学で何ができるか? それは良き師、良き友、良き書物に触れることだよ」と言われたことです。確かに大学では良き師に恵まれ、良き友が出来て生涯交流が続いていますが、残念ながらいまだに何度も読み返すような良き書は、私が乱読主義の所為かいまだに見つからない事は反省させられます。その他にも「研究(仕事)の成果は『運・根・才』であり、人生の運を『旧運』から『新運』にかえるのは『根・才』である」とも言われました。ご自分のご病気の体験からのお言葉と思いますが、それらのお話を聞きながら我が身を振り返り、身に染みて覚えています。

そのOB会では先生は統計についてではなく人生についてのお話をなされた他に、多くの心温まるお話をパソコンで冊子にされたものを頂いたことがありました。そうした心に栄養を頂くような会合でしたので、九州各地はもとより関東や関西等に在住の元統計ゼミ生が福岡まで来て参加していました。きっとそれらの皆さんも私同様、先生から目に見えない何かを頂いていたのでしょう。

更にこの会にもう一つ特異な事がありました。大屋統計ゼミの教え子の一人で私たちの後輩にあたる浜砂敬郎氏が九大に残られ、大屋先生の退官後は統計ゼミを引き継がれました。当然浜砂先生は我々の統計ゼミOB会に来られており、更にその浜砂ゼミ



昭和38年2月 卒業前のころ 先生の研究室で
左から柴田、大屋先生、佐野



のOB達も一緒に参加するようになり、実質「大屋・浜砂ゼミOB会」となってしまったことです。この統計ゼミOB会は大屋先生という大樹の下に集まる、非常に稀有なOB会だったと思います。年々この統計ゼミOB会に参加を呼び掛けるOBの方々が増加して、幹事の嶋田君も一苦勞だったことと思います。この統計ゼミOB会は永遠に私たちの誇りでした。

残念なことに浜砂先生が先に亡くなられ、今度は大屋先生がお亡くなりになられて一つの時代が終わった感じです。何かとても大切なものを失ってしまった喪失感で一杯です。

まさに「巨星、墜つ」という言葉がぴったりと当てはまります。本当に大屋先生は私達の人生の良き『師』、そして生涯の『師』でした。

大屋祐雪先生、有難うございました。どうぞ安らかに休みください。 合掌



平成18年10月 大屋ゼミOB会
九重・九大山の家合宿で大屋先生を囲んで。(先生と奥様は前から2列目)

大屋祐雪先生を偲んで

法政大学名誉教授 森 博美氏

1970(昭和45)年卒



昨年9月15日、コロナの終息が見通せない中、大屋祐雪先生が95歳で逝去された。これまでの学恩に感謝しつつ、昭和40年代に学生時代を送った者からみた先生の人となりに思いを馳せるとともに謹んでご冥福をお祈りしたい。

六本松での1年半の教養課程を終えた私が箱崎キャンパスで先生のゼミの門をたたいたのは43年の春のことであった。助教授として経済学部に着任されて6年目、教授に昇格される年である。以来、職

を得て私が福岡を離れる51年春までの約10年間、学部生・院生として様々なご指導を賜った。

100年ぶりのパンデミック下で対面授業がままならなかった昨今とはまた違った意味で40年代の九大は特異な状況下にあった。日大、東大闘争に端を発した大学改革を求める学生運動の波はほどなく九州にも押し寄せた。ただ九大の場合には他大学とは違い、原子力空母エンタープライズの佐世保寄港や米軍機の構内墜落を受けた市民も巻き込んだ基地反対運動がその発端であった。それが44年1月の米軍機体引きおろし事件や春の大学管理法問題で本格的な大学紛争へと展開し、バリケード封鎖や機動隊導入等を結果する。40年代とはそういう時代であった。

『同窓会報』第62号の「リレー随想」に自らの研究遍歴を記しておられるように、先生はわが国の政府統計に戦後導入された標本調査にいち早く注目され、30年代初頭にはその理論的・数理技術的根拠、さらにはその全数(悉皆)調査との統計体系的位置づけを論じた一連の論文を公刊されている。さらにそこでの知見は統計の作成から利用に至る全過程をその時々々の社会経済体制に制約された社会的営為として理論化され、最終的に39年の「反映=模写論の立場と統計学」によって、当時学会を席捲していた「統計学=社会科学方法論」説に代わる新たな「統計学=実質科学」説を世に問われることになる。

その後先生は、学術面ではこのような問題意識から行政目的と統計の作成、利用、統計制度等に関する論稿を次々と発表される一方で、学内行政面では43年以降紛争により混迷を深める大学執行部を支え、また学生とも真摯に向き合うという学術、大学行政両面で多忙を極められた。また、『同窓会報』第67号の「特別寄稿-「ガン」闘病私記」にあるように、ご自身若くしてガンに罹患され、常に再発のリスクに身を置かれていた。「やれる間にやっておこう」という気概がそこでの精神的支えとなっていたものと推察される。

ただ、ゼミなどではこのような錯綜した事情をまるで感じさせることなく、先生はフランクに正面から学生と対応しておられた。ゼミの授業では当時話題となったガルブレイスの『新しい産業国家』や統計を用いた日本経済分析などを学習した記憶がある。また、恒例の九住山の家での合宿では、経済学の古典を輪読したり久住登山、ご家族と一緒に一目山から涌蓋山、亥の湯へのトレッキングなども楽しんだ。自主ゼミと称して有志が研究室で『資本論』の輪読などもした。40年代とはそのような時代でもあった。

また、希望すれば学部生でも院生ゼミに参加できた。そこでは『唯物論と経験批判論』をテキストにパークレイ僧正やマッハ、カント等の主張を認識の場においてどう位置づけるかといった認識論をめぐる議論が午後10時頃まで時には酒を交えて延々と展開された。学部生の私にはまるで禅問答のように見えた議論が実は先生ご自身の「反映=模写」説の確認作業でもあったのを知ったのはずっと後のことである。

学部生時代のゼミ活動で忘れられないのが、統計調査の実習を兼ねて行った国民性調査である。これは文部省統計数理研究所が昭和28年以来全国で5年毎に実施しているもので、43年調査の九州・山口分を大屋ゼミで受託したものである。市町村選挙管理委員会に出向き選挙人名簿から対象サンプルを抽出し、訪問調査するというものであった。終了後の指宿・薩南への打ち上げ旅行も充実したゼミ生活の思い出の一齣となっている。

調査といえばもう一つ、私が福岡を離れた後、53年度文部省科研費で先生を中心に企画・実施した「統計環境に関する実態調査」が想起される。この調査は、社会の変貌が統計の品質に変容をもたらすことを調査データによって実証しようというもので、大屋理論のひとつの実践でもあった。調査では都市化という現実の進行が統計の調査環境の不可逆的な劣化をもたらすという仮説を立て、その実証のため都市化の進展度が異なる対象地域を九州各地と東京から選定し、調査への協力度やその背景としての人々の意識の違い等の比較考察を行ない、その成果は学会でも独自のセッションを組織し公表した。当時日本では統計調査とプライバシーの問題は殆ど組上にのぼっておらず、後に実施されることになる一連の統計環境調査のまさに嚆矢的調査としてその業績は今もわが国の統計研究史に刻まれている。

最後に、あまり知られていない先生の横顔にも触れておきたい。先生が趣味を「料理」と自己紹介されていたのを目にしたことがある。また、「料理は学問に通じる」ともよく語っておられた。これらからも想像できるように先生はことのほか「食」に熱心で、ご自宅でもよくゼミコンをやった。新築の立派な座敷で猛煙を気に留めることもなくゼミ生と一緒にジンギスカンを楽しまれていた。また、通勤途中に天神での乗り換え時に地下の食品売り場で好みの食材を調達されているという話もよく耳にした。学生結婚したでて私が警固の公団住宅に住んでいた当時、途中下車され「降りてこないか」と声をかけ



ゼミ集合写真 (2013.10.12)

られ、再開発で今はない「信長」に誘ってもらった。また、赤坂門の路地裏には論文を書き上げた際に自分への褒美として通われていたという西中洲の名店暖簾分けの大人の隠れ家的な店があり、後に帰福した折によく御馳走になった。「食」を介してではあるが、いずれも先生との忘れ難い思い出である。

大屋先生と大屋ゼミと私

嶋田 正明氏

1979(昭和54)年卒



大屋祐雪名誉教授が亡くなられました。訃報と略歴と感懐が長男祐輔（琉球大学病院長・教授）さんからゼミ生宛に送られてきました。

『父 祐雪は令和3年9月15日午後3時53分に一生を終えました。父は、大正15年6月24日、柳川西琳寺の跡継ぎとして生まれました。その後、中学伝習館、海軍兵学校を経て、佐賀高等学校から、九州大学経済学部に進学しました。戦争、戦後の混乱、その後の社会の復興の中で、多くの人が幸せに暮らせる社会を作る人間となりたかったようです。そのためにも、将来の日本を担う人材を育成する仕事として、大学教員を選んだのでしょう。海軍兵学校では、戦時中でありながらも、戦後に生きる人材が日本を再興する礎になるとして、何よりも人材教育に力を入れていたと聞いていますので、父もその影響を受けていたのかも知れません。その後は、熊本商科大学、九州大学、北九州大学、下関市立大学と、一貫して大学人としての道を進みました。卒業生の皆さんは



久住九大山の家ゼミ合宿 (1966年頃)

父にとって誇りであり、自分の社会への貢献の証しだったと思います。』

昨夏、私が編集し直し先生に送ったゼミ名簿を手にして、一人一人の教え子の様子を気に掛け、振り返っておられたと祐輔さんが話していました。

私とは言えば、コンパ係に熱心で、ゼミ生としては不出来でした。卒業して気がついたら、同じく大屋先生の教え子の故・浜砂敬郎名誉教授（昭和44年卒）の指導の下、大屋ゼミ、浜砂ゼミの名簿の整理をしたり、ゼミ同窓会のお世話係になっていました。

ゼミ同窓会をする度に、大屋先生は必ず初耳の話をされるのです。その中で一つ。過年、九重登山の遭難で亡くなられた九大生の親御さんが、息子さんにかけて愛情をこれから続く青年に向けようとのご意志で、九大山の家ができた事など話されました。建築当時からいらっしゃる山の家の管理人ご夫妻を労って懐かしく談笑されていたのが印象に残っています。その後、九州国立大学研修所の設立、よく覚えていませんが、九大学生歌公募から「松原に」に至る道、山の家の懐かしいおでん定食をいただきながら、世代を超えたゼミ合宿になりました。

追悼 田北廣道先生を偲んで

田北先生、早過ぎるお別れです

九州大学経済学研究院教授 藤井 美男氏

1980(昭和55)年卒

1983(昭和58)年博士入

田北廣道先生。訃報に接し、あまりに突然のことで言葉を失いました。あなたを良く知る人は皆おなじ思いであろうと想像します。

11月4日に休暇を取得して、私は久住方面へ家族とドライブ旅行に出かけました。その折、故森本

近年になって奥様との出会いに始まって、曾孫まで恵まれて大変喜んでおられると聞きました。奥様から、嶋田君は「いつまでもコンパ係ね」と言われていました。柳川でジョン・レノンの奥さんになった小野洋子さん、郷里の柳川でとてもいいお嬢さんだったと言われていたのをふっと思い出します。三畏閣でゼミ同窓会もいい思い出です。ライスレポート、GHQの事、必ずその時、当時の世相の背景となる世界事情を絡めて語られました。

長男の祐輔さんは、赤ちゃんの時は、一期生の柴田さん達が触れられて、私達は高校生の時、九重のゼミ合宿にご一緒して、成長の過程にあわせて次男の幸輔さんと共にご一緒させていただきました、幸輔さんは大阪大学経済学部教授をされています。

初めてのゼミ合宿の時、同級生の下山君達とはしゃぎ過ぎてしまって、大屋先生から「学問をする気の無い君達はすぐ山を降りてゼミを去りなさい」と真顔で言われた時、浜砂先生から「彼らには未来がある、ここは反省するなら一度はお納めください」と言われて、大屋先生は私達がゼミ合宿に残っている事に何も言われませんでした。浜砂先生が居なかったら私達の人生は変わっていたでしょう。良き師、良き友、良き本との出会いが、大学での最大の収穫と財産になると言われたのを今でも思い出します。

【荻野喜弘氏より】

前号71号私の文の記載に誤りがありました。下記の通り訂正させていただきます。

■秀村ゼミとお酒の思い出、「日田」⇒「人吉」。

■福岡支部総会の日付、「2019（平成31）」⇒「2019（令和元）」。

芳樹先生主宰の研究会で以前良く訪れた九大「山の家」を四半世紀ぶりに見学し（施設は閉鎖中）、増改築されたその様子を当時の研究会の皆様へ報告したところ、いち早く感想を送っていただきました。

「藤井様：一昨年、涌蓋山（わいたさん：藤井注）

に登ったとき、そばを通りましたが、山の家はみませんでした。明日は、久住・中岳に登ります。5時起きの強行軍ですが、紅葉も楽しめるかもしれません。先日、伊都キャンパスの中央・理系図書館に行き、シリーズ論文の材料を補ってきました。書き上げるまで、身体と頭脳がもってくればよいのですが。田北」

このメール文を読んだのは、老母を実家へ連れて行き、拙宅に戻って訃報を聞いた後のことでした。なんと悲しい最後のやりとりでしょうか。奥様と二人で久住へ登られている途中、心臓発作で突然倒れた由。定年退職された後もすこぶるお元気だっただけに、運命を恨まずにはいられません。

先生に初めてお目にかかったのは、森本先生のゼミ生としてでした。こちらは学部3年生、田北先輩は既に博士課程で研究を進められていました。どこだったか失念しましたが、森本先生と3人である飲み屋に行った際、4年生の私に大学院への進学を強く勧めて下さったのも田北先生でした。席を外しておられた森本先生が、「田北君が藤井君に深刻そうに話していたので、トイレから戻るに戻れなかったよ」と後日笑いながらお話になっていたのを、昨日のこのように思い出します。

その後西洋経済史という学問分野と大学の片隅に

特別寄稿

日本半導体産業の寿命



ASA Microsystems Japan
株式会社代表取締役

三輪 晴治氏
1960(昭和35)年卒

(1) 日の丸半導体産業の寿命はあと8年

経済産業省が2021年6月に公表した『半導体戦略』のなかで、「日本の凋落—日本の半導体産業の現状」として、これから先の日本半導体産業の姿を描いた。1988年日本半導体産業は世界半導体市場の50.3%を占め、世界のトップに上り詰めたが、しかしこの年をピークにして、それ以降一直線で日本半導体のシェアは低下し、2020年

身を置けるようになってからも、ふがいない後輩を叱咤激励して下さいました。今にして思えば、いつもあなたの背中を追いかけていたように感じます。

「市場史の射程」を完成させて森本先生との約束を果たそうと、御退職後も精力的に研究を続けておられました。最近伊都キャンパスの図書館で資料蒐集をされたのもその一環だったのでしょうか。路半ばで目的を果たされなかったのは、さぞ心残りであつたろうと思います。

コロナ・パンデミック終息後には、奥様と外国旅行においでになる計画もおありだったとか。いまごろ、ライン河畔を散策し、懐かしいケルンの大聖堂を見つづ、クヌーデルをつまんでおいしいドイツ・ビールを飲んでいらっしゃるのでしょうか。

学問に対する強い情熱と自らを律する厳しい姿勢ゆえに、時に誤解を招く気味もありましたが、本当は人にとってもやさしく情に厚い人でした。御家族を愛し、お孫さんたちを慈しみ、庭の草花に手を入れながらの日々が、急に断ち切られてしまいました。何よりも御本人が無念であつたろうと強く思います。

私たちにとてもありがたいお別れです。せめてもう一度、箱崎の「海門」で飲みたかったですね、田北さん。献杯。合掌。

[2021年12月6日。月命日の日に記す]

は10%を切った。「この延長線を辿ると2030年には日本の半導体のシェアは0%になる」と経済産業省は言っている。つまりあと8年で日本半導体産業は消滅するというのである。

日本半導体産業が衰退したのは、日本が「プロセッサを含めたロジック半導体製品・システムオンチップ(SOC)」を開発しなかったからである。特にSOCの中心になる「プロセッサ」については日本発のものはなかった。日本には、「半導体製造装置産業」、「半導体材料素材産業」はあるが、製造装置で造るべき日本発の「半導体製品」がないのである。

(2) 日本基幹産業の衰退

これまで、日本の基幹産業は、アメリカとの貿易戦争、資源環境問題、世界市場の変化のなかで、衰退していった。かつて世界で隆盛を極めた日本の繊維産業、造船産業、鉄道車両産業、鉄鋼産業、機械産業などはいろいろの理由で斜陽化し、衰退してきた。

資本主義経済社会は「商品経済社会」である。「資本」と「商品」が経済社会のなかを常に巡りながら

動くのが資本主義経済である。しかし商品には「S字カーブの寿命」があり、いずれは衰退する。つまり資本主義経済が発展するには、「資本」と「新しい商品」が常に「新陳代謝」しながら社会の中を巡る必要がある。さもなければその資本主義経済社会は衰退する。その発展の原動力は、イノベーションによる「新しい商品・産業の開発」である。同じ商品、同じ産業が永久に続くことはない。常に商品・産業は、生まれ変わりながら、変身して資本主義経済社会は発展するのである。しかし日本経済はこの30年商品・産業の新陳代謝ができなくなり、衰退の道を歩んできた。

アメリカの産業はシリコンバレーで大きく変身している。アップル、グーグル、アマゾン、フェイスブック、そしてクアルコム、エヌビディア、ブロードコムなどの新しい企業が生まれ、新しい商品を次々と開発し、新しい市場を創造し続けている。これは正に「創造的破壊」である。

従って既存の産業が衰退し、既存の商品が売れなくなるのが問題なのではない。日本では、産業、商品が次々と変身し、新陳代謝しないことが問題である。世界の半導体商品も、これが世に出てから変化し続けて発展してきている。最初の半導体商品はソニーの「トランジスター・ラジオ」であった。それから1958年にジャック・キルビーによる「IC技術」と1959年にロバート・ノイスによる「プレーナ技術」が開発されてから、「大型コンピュータの半導体」、「通信機器のチップ」、「ワークステーションのチップ」、「家電商品のチップ」、「パソコンのチップ」、「携帯電話のチップ」、「ゲーム機のチップ」、「スマートホーンのチップ」などの半導体製品が開発され、そしてそれがどんどん変身し、新陳代謝しながら、次々と新しい市場を創造してきた。ところが日本はその「変身と新陳代謝の波」に乗れなかった。

これからAI(人工知能)技術、IoT技術、Sensor技術であらゆる電子機器システムが変身することになる。技術と市場の変化は、新しい商品を出す大きなチャンスであり、日本にとっても「新しい半導体商品」を開発するチャンスである。日本半導体の再興をかけて、そのチャンスを生かさなければならない。

(3) 新しい経済社会を創るこれからの半導体

人間は「火」を発見し、「文字」をつくり、「道具」をつくって成長してきた。「道具」は人間の手足の拡張である。そして人間は「半導体とソフト」をつくった。「半導体とソフト」は「人間の脳」の拡張

であるが、更に半導体とソフトは「ネットワーク・チップ」により地球上のあらゆるものを繋いで、動かし始める。地球全体にセンサー・チップが設置される。「AI(人工知能)とAIプロセッサ」が「ネットワーク・チップ」で自律的に世界全体に繋がり、拡張し始めている。

世界のプロセッサは、これまでIBM社(大型コンピュータ用)、インテル社(パソコン用)、イギリスのアーム社(スマートホーン用)が、変身しながら時代時代でリードして、半導体産業、IT産業の発展を牽引してきた。これからの脱炭素社会では、「エネルギー消費の削減」が重要なこととなる。しかしインテルやアームのプロセッサの「アーキテクチャ」では「超低消費電力化」には対応できない。これから拡大する「AIチップ」と「ネットワーク・チップ(6G)」はますます電力を喰うものになる。つまり「超低消費電力化、高パフォーマンス化、低コスト化」の必要である。半導体の消費電力を低下させるには、もはや「微細化加工の道」は進めなくなった。28ナノぐらいから微細化加工の効果がなくなったのである。これからは、微細化加工に頼らないで、半導体の「新しい設計手法」で省エネ化を追求することが必要である。つまりプロセッサ自体と半導体SOCが省エネになるような「アーキテクチャ」にして、「超省エネ半導体」を開発しなければならない。

(4) 水平分業としての半導体産業構造

半導体産業の初期の段階では、半導体企業が自分で製造装置を造り、そして半導体の電子回路を設計する「EDAツール」を造っていた。特に日本の財閥系総合企業は何でも手掛け、半導体の一貫生産体制を造った。しかしアメリカ半導体産業は効率のよい「水平分業体制」を造った。特に半導体製造には高価な製造装置が要り、その複雑な製造装置を使うための製造ノウハウが必要になる。台湾政府は膨大な資金を投入してTSMCという半導体製造の受託専門企業を創り、世界の半導体製造の仕事を引き受けて事業を拡大した。TSMCの出現により半導体産業は「ファブ(製造)企業」と「ファブレス企業」に分かれ、「水平分業の産業構造」ができた。これにより産業全体としてコストが下がり、その技術が飛躍的に進化した。しかし日本はその動きを無視して、「総合企業」として事業を続けていった。このために日本半導体産業は儲からないものとなり、衰退していった。

半導体の電子回路の自動設計ツール（EDAツール）については、初期の段階では、半導体企業が自分に必要なEDAツールを開発していた。特に日本の半導体企業は自社用のEDAツールの開発に力を入れた。しかしEDAツールを開発するには膨大な資金と人材が必要で、しかも微細加工のノードが変わるとそれに合った新しいEDAツールを開発しなければならず、また集積度の高い、高性能の半導体チップに対して新しいEDAツールを開発しなければならない。これらを自前で開発することが不可能になった。アメリカでナショナル・セミコンダクタ社のEDA部門がスピンアウトしてEDAツールの専門会社「ケイデンス・デザイン社」ができてから「EDAツールの水平分業構造」ができた。日本では自前のEDAツールにこだわり、その水平分業化が遅れた。このために日本の半導体企業は儲からなくなり、衰退していった。

プロセッサなどの「IP」（機能を持った設計ブロック）は、これも当初半導体企業が自分のために開発して使っていた。しかしアーム社（プロセッサ）のようなIPの専門企業が出てきて、性能・機能で優れたIPが出てくると、それを使わなければ競争力ある半導体製品ができなくなり、「IPの水平分業体制」が確立された。しかし日本は自前のIPにこだわり、自分で造ろうとしたが片手間の仕事では優れたIPは出来ず、そのために付加価値の高い競争力ある半導体製品が開発できず、日本の半導体企業は衰退していった。

（5）日本での動きの一つの例

これから簇生して欲しい「日本発の半導体ベンチャー企業」の一つの例がある。これはまだスタートしたばかりで、最終的に成功するかどうかは分からないが、日本発の半導体ベンチャーとして日本半導体産業再興の一助になる可能性のあるものである。

筆者は2019年にASA Microsystems社を設立した。これからの社会が求める「超省エネのプロセッサ」を開発する会社である。2018年の10月頃、筆者の前の会社で仕事をしてくれたバングラデシュ人の優秀な技術者が、新しいRISC-Vプロセッサを開発したということで、私のところに相談に来た。「今世界で広く採用されているアーム社のプロセッサの消費電力より45%ぐらい低いものになったので、これで会社を立ち上げてくれませんか」ということであった。しかし、私はその技術者の提示した技術データを見て、「アーム社は、世界のプロセッサの40%ぐらいのシェアをもっており、従業員は6000人、売上

は2000億円を越える大企業で、このアーム社に対抗するには、消費電力が半分ぐらいでは立ち向かえない」と言った。「それではどのくらいにすればよいのですか」と言うので、「アーム社のものの10%以下にしなければ駄目だ」と言うと、悲鳴を上げて、その日は帰っていった。しかし1か月後にまたその技術者はやってきて「三輪さんの言う消費電力がアームのものの10%になるようにプロセッサのアーキテクチャをいろいろと工夫しました」と言った。その新しいデータと「新しい革新的なアーキテクチャ」を見て、「よし、このプロセッサで新会社を造ろう」と言って即決し、ASA Microsystems Japan株式会社を2019年にスタートさせた。

脱炭素社会では電子機器の消費電力を削減しなければならない。これまでの半導体は、性能を上げようとするとトランジスタを多く使い、ダイサイズが大きくなり、消費電力が大きくなるという「二律背反的」などところがある。このASAのプロセッサは、総ての要素を大幅に改良した。

ASAのプロセッサ「AR32Z」は、アーム社の同じクラスの「M4」プロセッサと比較すると、消費電力は10分の1、ダイサイズ（チップのコストはダイサイズに比例し、リーク電流もチップのサイズに比例する）は3分の1、性能（スループット）は2倍となった。AIチップなどではプロセッサを複数個使って並列処理するが、ASAは複数個使ったものを超低消費電力化する「アーキテクチャ」を開発した。同時にこのプロセッサを入れた半導体SOCの設計において消費電力を最小にするための「上位の設計ソフト（EDA設計ツール：ARSIM C/C++）」を開発した。ARSIMを使って設計したSOCの電気消費量は、他のプロセッサと設計ツールを使ったものの20%ぐらいになる。そして設計期間もこれまでのものの60%以下になる。ASAのプロセッサ技術は、シュンペータの提唱した「いろいろの技術要素の新結合」というイノベーションである。アメリカ・シリコンバレーの合言葉は「テンエックス」（10倍）である。新しい技術はこれまでのものの10倍以上優れたものでなければならない。

多くの場合、一度成功した商品の「技術的なアーキテクチャ」（骨格・構造）は中々壊せなく、捨てられない。IBMもパソコンのプロセッサを創ろうと膨大な技術者を投入したができなかった。インテルもスマートホーンのプロセッサを開発しようと膨大な資金を投入したができなかった。それは自分のこれまでの技術アーキテクチャに拘ったからである。

アーム社も現在のアーキテクチャに拘るとASAのような超低消費電力のものはできないであろう。

ASAの「プロセッサ」と「マルチコア・プラットフォーム」をIPとして使い、いま医療機器用の「AI半導体」、5G「通信機器用の半導体」、ガス・センサー半導体などが造られはじめている。このような

ベンチャー企業が日本から多く出てくる必要がある。私はASAの技術担当者には「いつか現在の技術アーキテクチャを捨てなければならない時が来る。その時はこのアーキテクチャを思い切って捨て、全く新しいアーキテクチャを創造せよ」と言っている。

リレー随想

「まほろば」福岡



橋本 純夫氏

1972(昭和47)年卒

昨年逝去された福岡道生氏は、数々の実績を残された尊敬する先輩で、同氏の日経連専務時代に知己を得た時は、初対面にもかかわらず、態々、日経連ビル屋上の立像、左が炭鉱士、右が看護師とのご説明に、筑豊を後背としていた製鉄所の労務担当時代のご苦労とご姿勢が思い浮かび、深く感銘しました。又、東京支部同窓会後、鉄砲洲の寿司店で慰労して頂いたことなど後進に対するお心遣いが懐かしく思い出される。ここに紙面をお借りし、ご冥福を改めて祈念する次第である。

さて、私の心の「まほろば」福岡は、石器時代から縄文海進を経た縄文・弥生期の家族・一族集落、環濠集落、国邑都市を経て現在まで連綿とした歴史を刻み、山と川そして海が美しい町である。想像だが古代は現在以上に背振山頂から北部九州一円が眺望でき、古代の人たちは眼下の各平野や丘陵などの時代時代の人の営みを知っており、尾根伝い或いは水路を利用した交易をしていた可能性がある。又、源流の一つ、英彦山の三大河川（筑後・遠賀・山国）が有明海、玄海・響灘、周防灘に注ぐが、流域の筑後・直方・中津平野と博多湾に面した福岡平野から唐津・伊万里・佐世保までが経済的に結びついたと思える。

幼少期は、母校の小・中学から九大旧教養部キャンパスがあった草ヶ江エリアが遊び場であった。旅人の歌「草香江の入江にあさる あしたづの あなたづたづし ともなしにして」が草ヶ江の由来と言

われている。草ヶ江は平和台付近にあった筑紫館の西の入江で、東の入江は交易の中心、那の津である。その南の大濠公園、南公園、米軍基地（返還後「山の上ホテル」）から昆虫採取の穴場、油山までが「まほろば中央」であった。

少年期は、背振山地と三郡山地の縦走や山麓の寺社仏閣と狭間の都府楼・大宰府訪問、その奥の水分峠を越えて広がる甘木、秋月、小郡などの名勝遠足その他、県内外でのスポーツ大会遠征などが記憶に残る。その頃まで、特需景気で高成長が続き、1955（昭和30）年以降は特需収束の影響はあったが、第三次産業の成長期を迎えた反面、「水俣」病など公害問題が顕在化し、身近の樋井川汚染に嫌な思いをした。

母校入学直後は、1968年ファントム機電算棟墜落事件で全学抗議デモ・学生運動が起き学内封鎖に発展、一方、青空講義とその後の懇談はコロナ禍の今と違い、喧々囂々 侃々諤々空論多発な一年間で鮮烈であった。

その後は箱崎キャンパスの電算機の可能性に驚き、都留ゼミなどで触れた次期都市交通システムやマーケティングなどに時代の変革を感じ、宮崎康平氏の「まほろしの邪馬台国」講演で中国史書に触れる機会を得た。学外では筑前国分寺五重塔心礎（径110cm）で寺院建築技術、車の分解・組立て車の製造技術を垣間見、更に最新機材を使ったTV会社のマーケティングや門司区の九州高速道測量・設計などが得難い経験となった。生活の支えとなった寿司屋さんでのバイトは捌きの他、店がはねた後の佐世保朝市での仕入れや伊万里（帯方郡から一万里？）有田焼調達などは趣味に、おまけは顧客支援で日本一周硬貨普及調査2回できたことだ。

卒業後はボーダレス・初期デジタル化（金融機関などの電算化急伸）とLSIによるマイコン化とダウンサイジング、その応用技術やパソコン開発など関わったが、今となっては一瞬の内に通り過ぎた車窓の風景である。

話を戻すが「まほろば福岡」は又、独自文化の上にも中国文化を同化させた日本の歴史遺跡の縮図でも

ある。遺跡に関しては母校中山博士の「比恵・那珂遺跡」発見から「板付・金隈・博多遺跡」、「粕屋部木（別火訛で出雲と関係？）古墳群」、早良「吉武高木遺跡」や平原遺跡など遺跡遺構・古墳群の相次ぐ発掘に繋がっている。政治的には、古墳時代の西新町遺跡が物語る国際化は宋書の「太祖元嘉二年(425)倭王珍の「除將軍」と「順帝昇明二年(478)倭王武の「開府儀同三司」は五世紀後半の將軍・幕府体制移行の証左かもしれない。文化・技術面では、6世紀末の奈良飛鳥寺(596)建立以降、白村江の戦いなど国際情勢が緊迫していたが7世紀末に九州初の「武蔵寺」建立から遣唐使で帰朝した留学僧や同伴西域僧の活躍が目立っている。特に寺院建築が先行して背振山頂の上宮東門寺(709)、油山正覚寺(725)、大宰府に筑前国分寺(741)、観世音寺(746)、戒壇院(753)等々に建築・装飾・工芸・冶金などの水準の高さが伺える。

個々については専門家の世界であるが、私的には古代経済、特に決済に興味がある。先ず、縄文から弥生時代に絞ると日本全域に集団生活の場があり、その集落は歴史の進展とともに発展・大規模化し、全国規模でネットワークを形成し交易の品物、数量、時期、経路を確定していったものと考えている。魏志辰韓伝(卑弥呼の時代)には鉄(鋌)を代替貨幣とした記録があり、日本でもつい最近までは年2回の盆暮れ決済の地域があり、その信用は現在の銀行口座でなく、例えば所有する田畑の収穫量であった。古代において鉄鋌以外の代替貨幣存在を仮定すると両替レートも仮定でき、魏志倭人伝記載の「市」の役割は物々交換や納租納賦だけでなく両替といった金融機能を持つことになり、考えるだけでも面白い。AIベースでDXが進展すると、信用確認は銀行口座を離れ、個人の収入支出の決済瞬時処理による支払い能力認証のシステム化への移行実現が見て取れる。実質的なデジタル円交換への近接でマクロではGDPから人本位のMB指標ができるかもしれない。

最後に福岡三山(立花山・油山・長垂山)が育んだ歴史を母校の地の利の一つにして頂ければ嬉しい。立花山は、旧箱崎キャンパスに近く、麓の香椎廟唐の配置や最澄の独鈷寺(805)、旧農学部跡地の阿恵官衙遺跡、日本唯一の女性城主となった立花闇(ぎん)千代(名護屋城で秀吉と対面)など忘れてはいけな。油山は日本初の油採取の地で旧教養部南にある。又、長垂山はペグマタイトと唐津までの展望が有名で北西の伊都キャンパスエリアは伊都国にありその周辺での遺跡から古代の製鉄所といわれてい

る等々多々ある。

母校の地の利を生かした日本と世界への貢献を念じ九大誘致に尽力された呉服商「紙與」に感謝している。

リレー随想

追悼・秀村選三先生

田川市石炭・歴史博物館館長 **森山 沾一** 氏
教育学部1969(昭和44)年卒

秀村先生の百歳を祝う会が準備されていると聞きながら、新型コロナ禍の中で延期となり、実現できないまま永眠されたことは誠に悲しみの極みです。先生の門下生である故・原口穎雄(えいゆう)とは入学前からの知り合いで生涯を共にする親友でした。1966年経済学部入学1970年卒業です。彼が秀村先生のゼミを選び、テキストに新書『日本資本主義発達史講座』を読んでいると知ったことが私の先生との最初の出会いです。

1967年、時代はベトナム戦争、沖縄返還、世界的学生運動の興隆となり、九州大学も例外ではありません。教育学部3年であった私は10月8日の佐藤訪米阻止羽田闘争で死んだ山崎博昭君に刺激され、博多区の地域活動と学内学生運動の両方をするようになりました。周知のように、九大では翌年、1月佐世保港へのエンタープライズ寄港反対、6月2日米軍用機ファントム4墜落・板付基地撤去運動へと続きます。

こうした環境の中、幼少時のポリオウイルス後遺症で松葉杖をつきながらキャンパス生活をしていた穎雄さんとは地域活動を通しての仲間でありました。彼は学生運動にもいくらか関わりながら、『日本資本主義と部落問題』のゼミ論文を纏めました。当時、ゼミの卒業論文は必須ではないと聞いていましたが、さらに彼は出身の福岡高校で教育実習を行い、高校社会科教職免許を取得して卒業しました。

その後、彼は九州三菱自動車勤務中に秀村先生たちから誘われ、発足した福岡部落史研究会事務局長となり、季刊『部落解放史・ふくおか』を編集・刊行することとなります。私も紆余曲折を経て、福岡部落史研究会で同人兼事務局長として共に活動することになりました。

研究会発足直前に秀村先生は「九州における部落史研究」で科研費申請(中村正夫社会学教授代表)

を行っていました。地域で部落解放運動に関わっていた私は、今思えば傲慢にも「何のための部落史研究か」と研究室を訪れたことがあります。その後、機関誌が刊行され、研究が蓄積される中でたびたびそのことを先生から言われ恐縮していました。

先生は部落史研究の面でもすごい博識を持ち、近世地方文書を数多く収集していた故松崎武俊さんと共に西南地域の近世部落史研究をけん引されたのです。中でも九大に保管されていた『筑前国革座記録』(全三巻)や『松原革会所文書』を松下志朗先生や研究会の同人と翻刻・刊行された業績は素晴らしいものです。

こうした仕事をされている間にも本業の学部での活動以外に、田川郷土史研究会の活動に協力して筑豊炭鉱の研究(『筑豊炭礦誌』の翻刻1975年、『筑豊石炭業史年表』1980年等)や佐賀県多久市で多久古文書の村を開村しその村長になられていたのです。これらは『同窓会報第71号』で東定宜昌名誉教授が詳しく書かれておられます。

同じ志を持つ<同人>の名称で初期部落史研究会はたびたび宿泊研究会をしていました。対馬や被差別部落の集会所近くに宿を取り研究発表、総会、そして夜明け近くまでの懇親会が 있었습니다。こんな時、秀村先生が良く言うのは次のような事でした。「1970年前後、学生諸君から産学共同路線粉砕を言われたが、確かに今の大学は問題が多い。それで私は民学協同をすることにした。大学を出て市民・地域と共に学び合う」と。

学術的に深い蓄積を持ちながら<地元の事は地元の人が一番知っているので地域に入る>姿勢や<市民・住民と共に事実を学ぶ>先生の謙虚さは生涯続いたと思います。

同じく1970年前後の大学時代に影響を受けた滝澤克己文学部教授の<同じ人間・ただの人>という哲理と共に、私の中に少しは生きているかもしれません。福岡県立大学の教員時代、発見した山本作兵衛日記・手帳を田川・筑豊の人々と共に16年間解読し、16冊の叢書に出版出来たのも、秀村先生や滝沢先生の生き方を学んでいたからだと思います。それが、ユネスコ認定の日本初世界記憶遺産になったことはいくらかの恩返しになったかもと恥じ入る次第です。

2014年、公益社団法人福岡県人権研究所設立40周年事業で、『被差別部落の歴史と生活文化～九州部落史研究の先駆者・原口穎雄著作集成』(明石書店A5判492頁)を出版出来ました。石瀧豊美福岡地方史研究会会長、首藤卓茂かぼちゃ堂店主と私の3

人の仕事でした。故・原口穎雄への紙碑(しひ)のつもりでした。その序文を3人が尊敬する秀村先生に依頼、城西のご自宅にもお邪魔しました。卒寿を超えていると丁寧に断わられていたが、全体の校正刷りをお送りしたところ、書いて頂けたのです。3頁にわたる名文で、私たちは感銘し喜び修正することなく活字になりました。

この文章が先生の最後の著書『恩師・知己・旧友』に掲載されました。「原口君、君は君らしく精一杯生きたね。この本は君の生涯をまともに語っているよ」と書かれた先生の声は今も聞こえてくるようです。

リレー随想

恩師秀村選三先生

萩尾 明彦氏
法学部1979(昭和54)年卒

私は、1975年度前期に、毎週金曜日放課後、六本松の教養部玉泉館で行われる「古文書を読む会」に参加した。講師として古文書解読の手解きをして下さったのが、九州大学経済学部教授で日本経済史担当の秀村選三先生であった。この年度4月に経済の大学院修士課程に進まれた江藤彰彦さんもこの会に参加されていた。テキストの古文書は秀村先生が玉泉館所蔵の三苦文書等から選ばれ、教養部図書館司書の手塚恒子さんがそれをコピーし印刷して、学生用のテキストを準備された。玉泉館は秀村先生の旧制福岡高等学校時代の恩師玉泉大梁先生が収集された考古資料、歴史資料、三苦文書等を展示・収蔵する資料館であり、旧制福高時代からの建物である。先生は解読だけでなく、歴史の話も交えて解説をし



写真1 1975(昭和50)年後期の古文書を読む会、玉泉館前。前列中央が秀村選三先生、前列右端が秀村ゼミ清田(昭和52年卒)、前列左端筆者。清田さんはJT九州支社長時代に、九州支社敷地内に残る「飯田屋敷の大銀杏」の説明の石碑建立に飯田家と協力して尽力された。

て下さる。先生の解説を興味深く、楽しく聴いたものであった。読む会が終わると、茶話会になり、先生もお残りになって色々お話をされた。あるとき、「あゝ玄海の浪の華」で始まる旧制福岡高等学校の応援歌「あゝ玄海」とその振り付けを先生自ら披露され、私たちはその伝授を受けました。

九大祭（1976年11月）の時、古文書を読む会メンバーで玉泉館で展示を行った。展示終了後、午後11時過ぎまで打ち上げをしたところで、秀村先生のお宅にストームをかけることになり、日付も変わろうとする時刻に城西の先生のご自宅に押しかけた。ガストーブが焚かれたお座敷に通され、その時先生はものを書かれていた。床の間には鎧櫃に甲冑が飾ってあり、壁には額装された古文書が掲げられていた。畳には先生の多くの蔵書が並べられていた。先生は嫌な顔をされるでなくこやかに、明け方4時半ごろまで、サラダを肴に酒を飲む私たち学生と談笑して下さった。

1977年5月21日～23日、第46回社会経済史学会大会が九大箱崎キャンパスで開催された。経済学部長を勤めてあった秀村先生が中心になって学会の準備をされた。この先生が小学館の『天保の改革』を書いた津田秀夫先生か、この先生が慶応の中田易直先生か、専修大学の古島敏雄先生はショルダーバッグを袈裟懸けにされていたのが印象的だ、法制史の大家瀧川政次郎先生は欠席で拝顔出来ず残念など、受付の手伝いを楽しませて頂いた。

1976年度後期、箱崎の本学へ移ったころ、秀村先生の元で歴史を学びたく、先生に経済学部への転部を相談した。「萩尾君、転部は出来ます。でも法学部でも法制史という歴史が学べますよ。法学部だから法科派の法制史を勉強して欲しい。私は法制史学会に入っていますよ」との意見を頂き、結局転部は



写真II 1977（昭和52）年5月22日、第46回社会経済史学会大会の経済学部長室にて。振り向かれた秀村選三先生、その右隣は武野要子福岡大学商学部教授、右隣佐伯弘次（文学部国史4年）、秀村先生の左隣は作道洋太郎大阪大学経済学部教授、テーブル向こう左側は宮本又次大阪大学経済学部名誉教授、その右隣は安藤良雄東京大学経済学部教授、右隣筆者



写真III 1977（昭和52）年6月ごろ、秀村先生の幼稚園時代の幼馴染みの方が嫁がれた福岡市大名の松村家の古文書調査。前列左から四人目秀村選三先生、右隣藤本隆士福岡大学商学部教授、二列目右から、松下志朗九州大学経済学部助教授、筆者、三列目右から、佐伯弘次、藤（秀村ゼミ、昭和53年卒）、福地（秀村ゼミ、昭和53年卒）

しなかった。その後、先生のお宅にお邪魔した折、法科派法制史の学祖中田薫の法制史論集を見せてもらった。中田薫の訃報の新聞記事の切り抜きが論集にはさんであった。私は東京神田の山陽堂書店から中田薫の法制史論集を取り寄せた。

1979年4月、私は福岡市内の私立の女子高校の社会科学の教員になった。秀村先生から「法学部は卒論がなかったでしょう。卒論の代わりに何か書いてみませんか」とお誘いがあった。私は九大法学部所蔵の古文書をもとに文章を書いた。その私の文章を先生が編集してあった『西日本文化』に掲載して頂いた。1995年、先生が編集されていた『西南地域史研究』第10輯に寄稿したさい、参考文献を掲げていたのに対して、先生から「参考文献でなく、注にしてください。これは補注にしたらいいですよ」と助言を頂いた。2016年1月23日、先生が立ち上げられた地域史料研究会・福岡で私が発表を行った。大雪にもかかわらず、秀村先生は会場にいらっしやって、私の発表を聴いて下さった。旧制修猷館中学の夏服の色のことや「兄（先生の長兄秀村範一氏）が『九州史苑』を読んでいたので、私は『筑紫史談』は読んでいません」等のコメントを頂いた。

秀村先生の業績で忘れることが出来ないのは、1973年から1979年にかけて朝日新聞（西部版）に毎週土曜日「筑前古話 研究室から」を連載されたことです。筑前地域についてのおもに江戸・明治の歴史エッセーである。毎週興味深く読ませていただいた。切り抜いてスクラップにしている。先生を中心に藤本隆士氏、武野要子氏、近藤典二氏、今津健治氏、田中直樹氏らが執筆された。先生が執筆された「享保飢饉と飢人地蔵」で福岡市立城南中学校社会部の生徒たちが福岡市内の飢人地蔵・供養塔等九カ所をまとめたパンフレットを刊行したことを紹介された上で、「地道な郷土研究を育てられた藤野達善先生

に敬意を表したい」と記されている。秀村先生が実践された民学協同に欠かすことが出来ない思いや姿勢を私はこの敬意を表された文に見ます。

2019年5月13日、九州大学伊都の新キャンパス図書館で秀村先生にお会いすることが出来た。学食で昼食のお供をした。二人ともカレーライス注文し、スパイシーなカレーライスを先生からご馳走になった。その折、統計が話題となり、先生は「統計の数字は気を付けないといけない、と蜷川先生は仰っていましたね」と言われた。京都帝大教授で戦後京都府知事を務めた蜷川（虎三）先生の名前が出たのには驚いたが先生の話しっぷりには何かしら新鮮なものを感じた。これが私にとって先生の最後の言葉となった。

秀村選三先生から受けた学恩には感謝しかありません。長きにわたり本当に有り難うございました。

リレー随想

九大経済学部卒業19年目を迎えて



NTTデータ
岡元 勝彦氏
2004（平成16）年卒

1. はじめに

平成16年卒の岡元と申します。今回寄稿にあたりまして、現役生も読んでいるようだとの話をお聞きしましたので、卒業後の社会人の一例として、こんな会社人生もあるんだなと思ってもらえればと、社会人時代を中心に振り返りたいと思います。

2. 在学時代

私は在学中、岩田ゼミに在籍しておりました。岩田ゼミは今でこそ大人気ゼミで優秀なメンバーが集う精鋭集団と聞いておりますが、我々の一学年上ではゼミ募集の際に厳しい指導を行うと募集した結果、一人もゼミ生がいなかったという状況でした。そこで岩田先生は方針転換をされたのか、我々向け募集の際には、勉強は二の次、旅行が楽しい・仲良く和気あいあいといった、まさに夢のキャンパスライフといった甘い募集をされており、そこに惹かれて入ゼミしました。募集通り楽しくゼミ生活を過ごすことができましたが、我々以後は他大学との交流戦等をされていると聞き、素直にすごいなあと思います。また、在学時代は演劇部に入っており、六本松校舎

での舞台設営からテント公演まで、創作活動に没頭していた思い出があります。

3. 社会人になって

就職先は、NTTデータに入社しました。NTTグループは、5大会社があるのですが、NTTデータとNTT西日本の違いもよく理解せぬまま就職活動エントリーをした思い出があります。NTTデータでは文系理系問わずコミュニケーション能力に自信がある人材を募集しており、プロジェクトマネージャーという響きがかっこいいという理由で入社しました。入社後、地方銀行向けのITシステム開発のプロジェクトに配属されましたが、設計書やプログラミングなど、超文系人間には全く理解不能だと入社半年間は絶望していた記憶があります（ここでの苦労は後々役に立つのですが）。当時は九州の大学出身は幕張本郷の独身寮に集められており、前回のリレー随想の原口君（西南学院大学商学部准教授）ともここで出会いました。結局、住まいは千葉で勤務地は神奈川、九州から東京に行くに出てきた割には、東京は通過するだけかよ、って思っていた記憶があります。

多少は仕事に慣れ、銀行の方とも会話ができるようになってきた折、東京は人が多すぎるので福岡勤務がいいと希望を出していた所、入社3年目で西日本シティ銀行とNTTデータの合弁子会社（NTTデータNCB）が設立されることとなりました。当時3年目の若者でしたが、何やってもいいから新しいビジネスを立ち上げてこいという事業部長のオーダーで、念願の福岡勤務、百道で働きながら西日本シティ銀行の取引先へのITシステム提案を銀行の支店の方々や銀行OBの方と連携しながら、実施してきました。IT企業と銀行が一緒になって福岡地場企業を盛り上げていくといった、今までのNTTデータグループにはない新しいビジネスモデル企画推進を実施しておりました。

福岡勤務も4年半の月日が流れ、東京の地方銀行向けのソリューション企画セクションに戻るようになります。当時はタブレットが世に出はじめており、タブレットを使って銀行員の事務効率化・新たな営業支援ツール等のニーズが出ており、関西の某地方銀行と投信・保険に関する銀行窓販業務における新たな預かり資産営業支援システムを共同企画開発したことは印象に残っています。それらの企画検討は営業現場のニーズを踏まえつつ、銀行の役員層やNTTデータの経営層の考えをすり合わせていく大変骨が折れる企画でしたが、全国の地方銀行への

拡販・数十の保険会社システムへの接続をゼロから世に出していくまでを経験させていただいた非常にチャレンジングな取り組みでした。日経新聞にも取り上げられたりと、世の中に注目される仕組みをチームで作り出していったのは非常に貴重な経験でした。

その後、NTTデータグループにおける経営企画セクションへ異動し、事業計画策定・決算対応・次期中期経営計画策定といった業務に従事しました。今でこそNTTデータグループは海外売上高約1兆円、海外従業員約10万人といったグローバルカンパニーへ変貌を遂げておりますが、私が入社した頃は海外事業は全く無く、投資家の関心も果たして海外事業がうまくいくのか?といった点を中心でした。海外事業の計画や戦略を眺めながら国内事業とのポートフォリオを考えつつ、対外発表する計画をどう作っていくかと実務レベルで考えておりました。もちろん役員との対話を通して対応していく訳ですが、NTT持株や機関投資家との接点での会社全体の見え方という点で幅広い視野が身についたと思います。また、コロナ前でしたので、NTTデータグループの全世界の主要メンバーが集まるグローバルカンファレンスを地球の真裏のチリまで同行させていただいたのは、非常に得難い経験でした(全く英語ができない中申し訳ない気持ちもありましたが…)。

その後、現在はNTTデータグループの国内地域会社を管轄するセクションに在籍しています。NTTデータには国内主要都市に9社子会社があり、金融ビジネスをどう伸ばしていくかを中心に、本社の数あるノウハウをどう活かしてビジネス展開していくか、といった仕事に従事しております。

4. これまでの会社人生を振り返って

岩田ゼミの同期とは、卒業後も旧交を温めており、年に1度程度は会う機会をもっております。「こんなゼミは岩田ゼミだけだよ」って他ゼミの友人には言われますので、岩田ゼミで本当に良かったなと思



卒業式 岩田ゼミ 2004年3月

います。現在はコロナの影響でなかなか会うことが叶いませんが、またぜひともコロナ明けには近況の情報交換など集めたいと思います。また、社会人人生約20年、様々な新しい業務において何とかここまでやってこられたのも、大学時代にゼミ・部活・バイトと様々なメンバーと多様なコミュニケーションを積み重ねてきたことが礎になっている気がします。社会人人生は折り返し地点を迎えてきましたが、九大生の名に恥じぬよう今後も精進していきたいと思っています。

リレー随想

九大の生活を振り返って



熊本学園大学准教授

新改 敬英氏

2016(平成28)年博士入

はじめに

経済学部同窓会員のみなさん

こんにちは。

私は経済学府の博士後期課程からの「九州大学ファミリー」参加で、学部も修士課程も他の大学です。そのような事情もありまして、このリレー随想のお話をいただいた際には少々逡巡しました。しかしながら、後述するように、短い在籍期間の中でも非常に濃く充実した時間を過ごさせていただきました。そこで、少しでも恩返しになればと思い、大変僭越ではございますが一筆書かせていただくことにいたしました。しばらくお付き合いいただければ幸いです。

入学式でのドタバタ劇

私が経済学府経済システム専攻博士後期課程に入学したのは、2016年4月のことです。これまで、周囲からいわゆる「天然」と評されることが少なからずありました。もちろん私自身は心当たりがまったくなかったのですが、入学式で「あ、やっぱりそうかも」と自覚させられるような経験をしてしまいました。

関東地方の大学院修士課程に在籍していたこともあって、4月初旬の時点で私はまだ横浜に住んでいました。ギリギリまで自宅にいて、当日の朝に福岡に移動することもできたのですが、熊本生まれの私からすると地元九州の最高学府の入学式です。「ちょっと高いかな」と思いながらホテルの朝

食ビュッフェでコーヒーを飲んだことを、昨日のこのように思い出します。

ホテルをチェックアウトし、まだ見ぬ同期たちの待つキャンパスへと向かいました。しかし喜び勇んで到着した私を待っていたのは、同期どころかほぼ無人の構内。まったく状況が飲み込めない私は、職員の方に話を伺いすべてを理解しました。「椎木講堂は伊都キャンパスですよ！ここは箱崎キャンパスです！」。はい、会場を盛大に間違えてしまいました。

「どうして入学式の案内を良く読まなかったのか」とお思いになる方も多いかと存じますが、私、読んだのです。それも何度も。それにもかかわらずなぜ箱崎に行ってしまったのか、まったく思い出せません。いまとなってはお恥ずかしい限りです。まあ、ちょっとした話題をつくることのできたのでプラスマイナスゼロですね。ちなみに、博士後期課程の学位記授与式にはしっかり参加させていただきました。



九州大学での学生生活

こうして入学式でのドタバタ劇から始まった九州大学での学生生活、実にいろいろなことがありました。ここではページ数の関係で、2つだけ紹介させていただきます。

まず、入学した4月、熊本地震に被災しました。特に2回目の本震の際は身を寄せていた熊本の実家の天井が落ちてきそうで、「これはもうダメかも」と思ったことを覚えています。幸い家屋は無事で、電気が復旧した被災2日後には宿題として提示されていた論文を一日中読んでいました。

次に、これが最も大きな出来事なのですが、博士課程2年目に入るタイミングで指導教官が変わりました。1年目に師事したのは、マクロ組織論がご専門の関廷媛先生(現・上智大学経済学部経営学科准教授)でした。これは他大学の修士課程で経営学修士の学位を取得した流れです。関先生のもとで1年間、とにかくマクロ組織論に関する海外の論文を読み漁りました。

関先生が上智大学にご転出されることになった際に、九州大学に残ることを選択した私が2年目から師事したのが、現・経済学研究院長の大石桂一先生です。大石先生は財務会計領域で素晴らしいご実績をお持ちであり、業界で知らない人はいないのではないかとさえ思える方です。私は果たしてついていけるのだろうか、と当時真剣に悩みました。しかし、それは完全に杞憂でした。大石先生は、文章を書くのが苦手な私にも辛抱強く、親身に、かつ私のこれまでの経験を生かす形でご指導くださいました。大石先生のご指導と、副指導教官の丸田起大先生、内田大輔先生の親身なアドバイスのおかげで、こんな私でも博士(経済学)の学位を取ることができました。本当に感謝しております。

ここまで述べてきたように、研究者としての私の知見はマクロ組織論と会計学のハイブリッドです。こう書くと非常に格好良く聞こえますが、悪く言えば中途半端で、正統派とは言えないと自分でも思っています。ただ、こればかりはもう仕方がないですし、見方を変えれば新しいことを発見できる可能性もあると言えそうです。なので、「異色のバックグラウンド」「ダブルメジャー(専攻)」「マルチタスク」といった形で、ポジティブに捉えることにしています。自分で言うな、って感じですね。

現在

しかし、九州大学での充実した日々も永遠に続くわけではなく、いずれは巣立っていかねばなりません。ということで、2019年3月に経済学府経済システム専攻を満期退学し、翌4月に熊本学園大学大学院会計専門職研究科講師として着任いたしました(2022年1月現在は准教授)。大学教員としてのポスト獲得が難しくなっている状況下において、お声がけいただけるのは本当にありがたいことでした。

現職では管理会計論を中心に、財務分析や経営管理などの実践科目を担当するほか、戦略実行に関する管理会計の研究を行っています。また、自治体が運営する経営幹部向けのビジネススクール運営や個別企業の幹部研修への登壇などを通して、少しずつではありますが地域における活動の幅を広げているところです。これらの活動のすべてにおいて、九州大学での学びと気づきが生かされていることは間違いありません。

おわりに

私は、九州大学でのキャンパスライフをもっと満喫していたくて、実は就職せずに大学に残るつもりでいました。毎食ビッグスカイの定食で構いません

し、実際、伊都キャンパスに毎日通うつもりで、九大学研都市や姪浜のマンションを内覧していました。いま思えば、そのくらい九州大学に愛着を感じていたということですし、それは現在もまったく変わっていません。まだまだ修行中の身ではございますが、大学組織、同窓会、そして現役生のみなさんのために、これから少しでも貢献できればと考えている次第です。

このたびはリレー随想の執筆という貴重な機会をいただき、誠にありがとうございました。最後になりましたが、会員のみなさまのますますのご健康とご発展を、心よりお祈り申し上げます。

リレー随想

コロナ禍の大学生活



経済学府経済工学専攻2年

平 安乃氏

2021(令和3)年卒

皆様はじめまして。平安乃と申します。私は2021年3月に九州大学経済学部を卒業し、現在同大学院の修士2年生です。今回、このような同窓会報への寄稿の機会をいただき大変嬉しく思っております。私からはコロナ禍における学生生活の様子や思いについて述べさせていただきます。

コロナの影響が本格的に全国に拡大した2020年、私は学部の4年生でした。大学の授業開始は1か月後ろ倒しになり、やっと始まった授業もほとんどがオンライン授業でした。最初はzoomの扱いに慣れないことや、授業中に発言や質問のタイミングをどのように取るかなどに苦労がありました。しかし、2020年の1年間で、オンライン授業は学生や先生方の間で大きく浸透しました。授業以外にも、オンライン化が進み良かった点があります。その一つが、学会などの会合にオンラインで参加する環境が整えられていったことです。自分の専門分野の学会や、学内の報告会などに自宅から気軽に参加できるようになり、参加のハードルが下がったように思われます。就職活動の選考やインターンなどもほぼ全てオンラインでの参加だったため、私は志望先の会社に一度も足を踏み入れることなく内定をいただくこととなりました。(就活で東京圏や関西圏などに頻繁に移動することは、地方の学生にとっては不利

な側面があるため、この点は、私にとっては幸運な流れだったかも知れません)。

一方で、サークル活動は満足がいくものとはなりません。私が所属しているサークル(百人一首愛好会)では、毎年夏に学部生の全国大会に参加するのですが、ラストイヤーである4年生の大会は残念ながら中止となりました。日々の練習も、その時期のコロナの感染状況を考慮しながら行われ、探り探りの対策が取られるため、なかなか大人数で集まることのできない状態が続いています。

しかし、コロナによる社会的制約の影響が最も大きいのは、コロナ禍の真っ只中で入学した現在の学部2年生、3年生ではないかと思われま。私は幸い4年生でしたので、影響が本格化する前に授業の単位をほとんど取り終え、サークルも存分に組み込むことができました。しかし、現在の学部2・3年生は、入学式で両手に受け取れないほどの勧誘のピラをもらうことも、新歓の食事に行くこともなく現在に至っています。私のサークルでも、大会数は私が学部1・2年だった時と比較しておおよそ10分の1以下に減っている模様です。また、後輩から聞いた話では、学部1・2年生は授業数も多く、そのほとんどの授業で出席点がなくなった代わりにレポート提出等が課されているようで、毎日たくさんのレポートに追われているそうです。学部生に限らず大学院生でも、留学生の方の一部は、日本に来ることなくオンライン授業のみで卒業する方も多く、対面で直接交流できなかったことが残念でなりません。

もちろん、ここで紹介させていただいた例はほんの一部で、限られた生活の中でオンライン授業やサークル活動を楽しんでいる学生も多くいるかと思えますし、コロナ禍で逆に自分の時間をより有効に活用している人もいるかも知れません。私自身も、コロナの感染状況が比較的落ち着いているときには、サークルの練習に行ったり、後輩と食事に行ったりすることもありました。それでも、私が学部2年生



だった頃の、何の気兼ねもなく毎月のように全国各地の大会や合宿に参加していたことと比較すると、やはり大学生の醍醐味を奪われているように感じています。

願わくば、一刻も早く感染状況が落ち着き、通常の学生生活を取り戻せますように。そして、後輩たちが授業も課外活動もその他すべての大学生活も全力で楽しめることを願って、結びとさせていただきます。

リレー随想

向上心のある馬鹿



経済経営学科3年

郭 秀嘉氏

○寄稿によせて

はじめに、経済学部同窓会報という名誉ある誌への寄稿依頼をいただきましたこと、関係者の皆様へ改めて厚く御礼申し上げます。今回は、私の学生生活と将来の目標、抱負について記し、リレー随想とさせていただきます。

○異例づくしの入学

2020年4月に九州大学に入学した私達は、所謂“コロナ世代”の1期生として、数えきれない程のイレギュラーと対峙しながら「新しい日常」を過ごしてきた。新型コロナウイルスの影響で授業の開始は例年よりも丸1ヶ月遅れた上、慣れないオンライン授業にキャンパスに足を踏み入れることすらも大きく制限された。SNS上には“#大学生の日常も大事だ”というタグが踊り、多くの学生が自身の窮状を訴えていたこと、それに比例して私自身の焦燥感も日増しに高まっていたことを鮮明に覚えている。結局1年生の前期は長崎の実家に留まらざるを得ず、ようやく寄宿舎へ入居しキャンパスへ通うことが叶ったのは同年の秋であった。その後は感染状況に対応しながらのハイフレックス授業(対面とオンラインを併用した形式のこと)が徐々に解禁される様になったものの、予断を許さないウイルスの猛威は、オミクロン株がかつてない速度で蔓延する2022年1月現在に至るまで続いている。

○諸活動への取組み

だが幸いなことに、私はいくつかの活動を通じて、コロナ禍の九州大学における基盤を作ることができ

た。その中で代表的なのが、「チアリーディング部 ETOILES」と「英単語アプリVocabee」である。

・チアリーディング部 ETOILES

対面での新歓が叶わなかった春、SNS上で偶然見かけた ETOILES の動画は、瞬く間に私を魅了した。先輩方の力強い演技と弾ける笑顔が、入学式の中止に意気消沈する私を鼓舞し、先の見えない学生生活への意欲を掻き立ててくれた。課外活動が解禁された2020年11月に入部して以来、鍛錬を重ねている。元々逆上がりすら出来たことが無い程に運動経験が皆無の私だが、多くの先輩と仲間、後輩に支えられここまで駆け抜けることができた。いやはや“チアリーディング”という競技の繋ぐ絆には、計り知れないものがある。

・英単語アプリ Vocabee

「豊かな英語の世界を手の中に」という想いの下、学部の同期らを筆頭に英単語アプリ Vocabee の開発はスタートした。2021年5月、私は広報担当としてメンバーに加入し、SNSを中心とした宣伝活動を行っている。開発作業はオンラインが主流であり、そのおかげで多様な所属のメンバーと繋がるのが出来た。彼らと共に同年10月には試用版のリリースまで漕ぎ着け、正式版に向けた更なるブラッシュアップを現在まで重ねている。「こんな出会い、縁だねえ」。そうメンバーと笑い合える時間が堪らなく愛おしい。

○コロナ世代の強み

そう言うもののやはり、かつて思い描いていた華やかな大学生活と、現在まで私達が歩んできたそれとがあまりにもかけ離れていることは事実である。例えば部活は度重なる緊急事態宣言に何度も活動の中止を余儀なくされ、アプリ開発では未だに対面で会うことすら叶わないメンバーがほとんどだ。「もしコロナが無かったら……」というやるせない思いに涙したことも一度や二度ではない。しかし同時に、そんな中でも例年以上の質の授業を展開すべく尽力された先生方、多くの大学生活情報を最大限提供して下さった先輩方、何よりもコロナ禍の入学で多くの苦楽を共にしてきた同輩達がいたことを、私達は忘れてはならない。ひたすら孤独と不安と戦い続けた「新しい日常」の中で、多くの活動に打ち込むことができたのは、ひとえに彼らの存在、彼らとの繋がりがあったからである。私達コロナ世代は、額を突き合わせてとことん突き詰める議論、共に汗を流し一つのことに打ち込む瞬間、何でも無いような下らない語らいといった「普通の日常」を送ることす

らままならなくなりました。だがその「普通」の尊さを痛感した分、これまで以上にかけがえのない絆と繋がりを得ることができた唯一無二の世代であると言えよう。

○将来について

昨年私は、九州大学基金の支援事業の一つである“山川賞”の受賞者に選出され、そこで改めて自分の目指す将来像と向き合い、言語化することができた。私の将来の目標は、“ジャーナリスト”である。



石橋達朗九大総長より山川賞授与
令和3年9月24日

元々文章を好んでいたことから、ペンの力で世界に羽ばたく人材に憧れたというのも、動機として当然ある。だがそれは、何よりも私自身が生涯を通じて向上心を忘れず、心身ともに成長し続けるための目標だ。情報の洪水とすら擲揄される現代社会は、コ

ロナ禍によってさらにその動きを加速させた。そんな中でも変わらず私達に求められるのは、まっすぐ情勢を客観視できる価値観と、それを裏付ける確たる知識、そして何より、常に自己の成長を促す向上心だ。私は大学で得た知識と価値観を以て社会に貢献し、ひいては自己の生涯に渡る研鑽に繋げるべく、ジャーナリストを志す。「私の想像の翼は、閉じ込められても、羽ばたき続けるの」。かのアンネ・フランクが自身の日記に遺した一節である。どんなに追い詰められた状況であろうと、好奇心の赴くままにペンを進め続けた彼女の姿は、まさに向上心そのものだ。どんな困難に遭おうと、歳を重ねようと、いつまでも童心のような知的好奇心を忘れず、未知のものに対し常に貪欲になる。そんな「向上心のある馬鹿」こそ、私の追い求める姿である。

編者注：「山川賞」は平成24年度から創設された「九州大学基金」における支援助成事業の一つであり、山川健次郎初代総長の名を冠した賞で、九州大学教育憲章が指向する優れた志を持ち、学業に優れ、将来、社会の様々な分野で指導的な役割を果たし広く世界で活躍することを目指す学部学生に授与されるものである。

ていただくとともに、お祝いを申し上げたく存じます。

1. 出版

先生のご退職に合わせて、翻訳本と雑誌の計2冊が出版されました。1冊目は、シャム・サンダー著『財務報告の再検討—基準・規範・制度—』です。サンダー先生は、インド生まれのカーネギー・メロン大学（CMU）教授。2006-2007年にアメリカ会計学会（AAA）会長、2020年にAAAの会計殿堂入りされるなど、会計学界の重鎮のおひとりであるのと同時に、実験経済学の領域においても優れた業績をお持ちである稀有な研究者です。母校CMUでの指導教授が井尻雄二先生（1982-1983年AAA会長）であったことから日本との関係も深く、徳賀先生をはじめとする監訳者・翻訳者の先生方とも長年親しく交流を続けて来られ、ご著書を翻訳する運びとなりました。

本著は、会計学だけでなく新古典派経済学、実験経済学、行動経済学、制度派社会学、経済社会学、法学、政治学、心理学などの幅広い学識をもとに、(とりわけアメリカの)財務報告制度の構造的な問題を、ルール、社会規範、会計基準設定機関などの側面から多面的・多角的に解き明かし、より良い財務報告とは何かについて会計人に問いかける名著です。そ

のような書の翻訳を、徳賀先生が金融庁・企業会計審議会会長、公認会計士監査・審査委員、企業会計基準委員会委員など、日本の会計基準設定に携わられるお立場から監訳者として出版されたことは、日本の会計基準設定においても大きな問題提起になったと考えられます。

2冊目は、『経済論叢』（京都大学経済学会）の「徳賀芳弘教授退職記念号」です。徳賀先生は、九州大学で7名、京都大学で12名の研究者を育てられました。当雑誌には九大の同窓生として、大石桂一先生、異鳥須賀子先生（久留米大学教授）、小川淳平先生（神奈川大学准教授）とわたくしが、先生のご指導のもとでそれぞれ進めてきた研究（順に、会計規制、監査、退職給付会計、国際会計）に関する論文を寄稿しました。

2. 学会の開催

日本会計研究学会（JAA）全国大会第80回大会が、2021年9月8～10日、九州大学を主催校として開催されました。JAAは1937年設立、前身団体である日本会計学会は1917年設立の歴史ある学会で、会員数約2,000名の日本有数の大規模学会のひとつです。九大ご出身でもある徳賀先生が2018～2021年度までJAA会長を務められたことから、伊都キャンパスへの移転を機に、九州大学として初めて開催校をお引き受けすることとなりました。本学の会計学教員として、大石桂一準備委員長のもとに、丸田起大先生、小津稚加子先生とわたくしが準備委員として加わり、さらに九大出身の大学教員や近隣大学の先生方のご協力を得て、ウェブサイト掲載内容の検討、プログラム・スケジュール編成、会長・評議員選挙、日本公認会計士協会の継続的専門研修制度の認定手続きなど、1年ほど前から準備にあたりました。5月に対面開催から全面オンラインでの開催へと変更になることが急遽決定されたため、母校での対面開催を強く望んでおられた徳賀先生はとても残念に思っておられるご様子でしたが、大会には約



2015年12月の還暦記念祝賀会の様子

900名もの参加登録があり、無事盛会に大会を終えることができました。

上記の企画のほかにも、最終講義や退職記念祝賀会の予定がありましたが、コロナ禍の影響により、残念ながら延期となりました。また、ここ2年は、毎年年末に箱崎キャンパス正門前のちゃんこ御島で行っているゼミ忘年会も開催できていません。コロナ禍が明けて、ゼミ卒業生一同、対面でお祝いできる日が来ることを楽しみにしているところです。

いまなお現役であるだけでなく、ますますご多忙を極めておられる徳賀先生には、いつまでもお元気で、第一線で活躍いただけることをお祈りしつつ、ご退職のお祝いの言葉に代えさせていただきます。

【参考】

Sunder, Shyam(2016) "Rethinking Financial Reporting Standards: Standards, Norms and Institutions," *Foundations and Trends in Accounting*. Vol. 11: No. 1-2, pp. 1-118. (徳賀芳弘・山地秀俊監訳／工藤栄一郎・大石桂一・潮崎智美訳『財務報告の再検討—基準・規範・制度—』税務経理協会、2021年)

大石桂一(2022)「日本会計研究学会第八十回大会大会記」『会計』第201巻第3号、57-98頁。

京都先端科学大学（KUAS）「先生に聞いてみた 徳賀芳弘教授」<https://www.kuas.ac.jp/interview/archives/1187>

京都大学経済学会（2021）「徳賀芳弘教授退職記念号」『経済論叢』第195巻第2号。

ミャンマー経済研究者としての想い



経済学研究院准教授

水野 敦子氏

私は、ミャンマーを主たる対象地域としながら、途上国の経済開発について研究している。

私が、初めてミャンマーを訪れたのは、1997年である。農村には、電気、水道は未開通、自動車も未普及であり、馬車や牛車が主な移動手段であった。ほとんどの家屋は伝統的な簡素な高床式木造で、屋根はヤシの葉で葺かれていた。家の中には、囲炉裏と僅かの家財道具があるだけで、電化製品は皆無に等しかった。腰巻布ロンジーをまとった人々は、明るく陽気で、驚くほどに親切で優しかった。若かった私に、その光景と純朴な人々との出会いは、強烈な印象を残した。当時のミャンマーは、1988年のクーデターにより軍政下にありながらも市場経済化を進め、同年にASEANへ加盟し



徳賀芳弘先生のご退職



経済学研究院准教授

潮崎 智美氏

1997(平成9)年修士了・博士入

1987年から2001年まで九州大学経済学部在職された徳賀芳弘先生（現・京都先端科学大学経済経営学部長・京都大学名誉教授）が2021年3月をもって京都大学をご退職されました。九州大学時代の教え子として、大石桂一先生（経済学研究院長）とともに、徳賀先生のご退職に関する企画にいくつか取り組みましたので、この場を借りてご紹介させ

ており、東南アジア最後のフロンティアと称されていた。外資の流入拡大によって、工業化の進展が期待されていた。私は、かつて東南アジア農村が経験したように、農民層分解が急速に進んで、牧歌的な農村が貧困化するのではないかとの思いにとらわれ、翌1998年に大学院進学しミャンマー研究を開始した。

しかし、ミャンマーの経済開発が進むとの観測は、見事に裏切られた。大学院時代に自己紹介をすると必ず、発展の展望が開けないミャンマー経済を何故、研究するのかと問われた。自らを暫定政府と位置づけた軍による統治が長引き、欧米諸国は経済制裁を課した。外資流入は限定的で、工業化は遅々として進まなかった。それを覆い隠すように、政府統計は実態を過大評価するようになり、統計データは全く信用できなかつた。実態を把握するためには現地調査が不可欠であった。地域研究とは、現地理解には限界があるという認識の上に、地道に、丹念に、限りある情報を収集し、社会経済構造を理解しようとする試みである。現地調査を通じて、ミャンマーの外形的な様相は変化せずとも、その内実が変容したことが明らかとなった。例えば、農村では、農業機械化が進まず、人畜に頼った農業が依然として営まれていたが、市場経済化や農業政策の影響によって作目は変化し、稼得機会を海外に求める労働力流出が増えていった。

現地調査による情報収集とその分析は、非常に時間のかかる根気を要する作業である。大学院進学から博士論文を書き上げるまで、妊娠出産による中断もあって、結局10年を費やした。大学院修了の翌2008年から2012年まで、在ミャンマー日本国大使館で勤務する機会を得た。

当時、軍政による「民主化のロードマップ」への国際社会からの評価は懐疑的であった。私自身も、2008年の新憲法制定の国民投票や、2010年総選挙の実施状況の視察にあたったが、その後、予想を遥かに超えて民主化が進むとは、全く想像できなかった。

2010年11月に、アウンサンスーチー氏が、通算約15年の長期に亘る自宅軟禁から解放された。解放後初めての演説を聞こうと、国民民主連盟（NLD）本部前は、黒山の人だかりであった。軍による弾圧の可能性が払拭しきれない中で集まる人々の姿に、私は甚く感動し、我を忘れてその中に分け入った。アウンサンスーチー氏が登壇すると、群衆から緊張感と高揚感が入り混じった大きな歓声がうねるように沸きあがる。それに怯えた私の幼ない娘が、大声で泣きだした。傍の老人に、もし軍が来たら逃

げる群衆に子供は踏みつぶされるぞとたしなめられ、我に返って帰宅した。

2011年に民政移管を果たし活況に沸くミャンマーを、2012年9月に後にして私は本学に着任した。ミャンマーの民主化は不可逆的であると見られるようになっていた。ミャンマー経済を研究しているとの自己紹介に対して、理由を問われることも無くなった。2015年の総選挙ではNLDが圧勝、2016年にNLD政権が発足した。輸出縫製産業に牽引されて工業化は進み、農村では大型機械の導入が進んだ。国内労働市場は拡大し、国内労働力移動が活発化した。一方で、農業の雇用労働力が不足し、農村の社会経済構造は変容しつつあった。以前よりも格段に自由になった現地調査を実施して、これらの変化を観察することが、私の研究者としての生きがいとなっていた。最後に現地調査を実施したのは、新型コロナウイルスの流行拡大の直前、2020年2月だ。以降、現在まで、現地調査を再開する目途が立てられない状況が続いている。

2021年2月1日未明、ミャンマー国軍は、クーデターを実行した。同日は、前年の総選挙後初めての国会召集で、第二次NLD政権が発足する予定であった。以降、アウンサンスーチー氏らNLD幹部だけでなく、多数の活動家が拘束されている。再び軍政下に置かれ1年が経つミャンマーでは、日常生活が戻りつつある一方で、国境地域を中心に軍の激しい弾圧が続き、経済低迷が伝えられる。残念ながら、ミャンマー国内の政治混乱に、国際社会が直接関わることは難しい。漸く手に入れた民主化とその果実がミャンマーの人々に戻るよう、願うばかりである。一外国人のミャンマー経済研究者としては、これまでの民主化期に実施した調査を纏め、その経済構造変化を知らしめること、そして、限られた情報を収集し、ミャンマー経済の実態を冷徹に分析することに、自らの使命があると信じたい。

信頼と安心//TRUST ME

補助金申請サポート

事業再構築補助金

税理士 **油布 寛** (昭54年経済卒)

油布税理士事務所
〒812-0016 福岡市博多区博多駅南2-10-9SDマンション博多駅南703号室
TEL:092-409-9434 携帯:090-9658-0481
E-mail:hirochanyufu@outlook.jp

HP検索 油布寛税理士



人物往来～退任

卒辞～九大の自分史～



経済学研究院教授

藤井 美男氏

〔専門分野〕西洋経済史

1980(昭和55)年卒

1983(昭和58)年博士入

私は2022年3月末日をもって、九州大学大学院経済学研究院を退任することとなりました。いわば九大を「卒業」です。そこで「九大の自分史」と銘打ち、少し過去を振り返ってみたいと思います。西洋経済史という学問を専攻していますので、時間を遡っての語りに少しお付き合いいただければ幸いです。

私は1975年4月に九大経済学部に入學しました。その前3月10日には山陽新幹線が博多まで開通していました。九大(当時の国立一期校)の入試は、その一週間前の3月3日～5日に行われていましたので、出身の山口県から特急列車に乗って受験に来たのを思い出します。高校時代はクラブ活動に明け暮れ、ろくに受験勉強もしていませんでしたので、九大に受かるとも思っておらず、紛れもなく「なんちゃって受験生」でした。ところがふたを開けてみると、合格発表のテレビ放送に自分の名前が出てくるではありませんか。当時は受験番号と氏名がテレビで放送されていたのです。個人情報保護法のある現在の目から見ると隔世の感があります。合格がうれしいというより、むしろ驚きのほうが大きかったように思います。高校の担任教師のところへ合格の報告をしに行くと「藤井の分もうけた」と曰い、やはり全く期待されていなかったことが分かった次第でした。

六本松の教養部では、生まれて初めての一人暮らし。大学のことも生活のことも良く分からず、右往左往しながらも、下宿(学生アパートなどはまだない)で仲良くなった友人たちと1年間何とか過ごしました。同じ釜の飯を食ったこれらの友人たちの多くとは、40年以上経った今でも「オマエ、オレ」の仲で付き合いが続いています。家族よりも長いそうした関係には、それぞれの家人たちに少々あきれら

れています。

半年間六本松と箱崎の間を通い(当時の教養課程は1年半)、やがて1979年2月には市内を走っていた路面電車が廃止され、その後市営地下鉄と天神地下街が出現。博多駅も改築されて新しくなりました。2011年3月その博多駅が再び新しくなり、新幹線も鹿児島まで延伸されたことが思い起こされます。3月11日の東日本大震災のため、予定されていた開通記念行事が中止となったのも記憶に新しいところです。

1977年学部3年生の時、その前に仏語経済の講義を受けていた縁で森本芳樹助教授(当時)のゼミに入りました。西洋経済史のことなど何も分からず、ゼミで大塚久雄の著書など専門書を読解するのに四苦八苦したのも良い思い出です。学部4年生になる少し前進路を考え始めた時、ゼミの先輩で当時博士課程におられた田北廣道さんに背中を押されるようにして、大学院へ進学しました(ただし一浪して)。その田北名誉教授は2021年11月に急逝されました。まだ71歳という若さで、今でも悲しく信じがたい出来事です。

修士課程に入った1980年の8月から翌81年の7月まで、ベルギーのカトリック・レウヴェン大学へ交換留学生として在籍することとなりました。昨今と異なり、正式な交換留学制度もない中、森本先生のややゲリラ的な仕方で実現した留学生活です。先方の指導者はヴァン＝デル＝ウェー教授(当時)で、身近に相手をしてくれたのがエーリック＝アールツ助手(当時)でした。2022年現在お二人ともお元気で、大学を退職後も精力的に研究活動を続けておられます。その後何度かベルギーを訪れ、研究のための資料蒐集など行いましたが、お二人を含め、留学時代に知り合った方々の変わらぬ友情には心から感謝しているところです。

帰国後修士論文のテーマを「南ネーデルラントの毛織物工業史」に定め、博士課程進学後もその分野での勉学を続けました。そして、1986年4月に就任した前任校在職中に学位を得(1997年)、翌98年には初の単著を出版することができたのは幸運でした。九州大学への就任は1999年4月。その後ほどなくして大学院大学への転換、国立大学の法人化といった大きな変革を経験することとなりました。そうした中、毛織物工業史の研究から必然的に派生した「中世都市と国家の関係」という研究課題に新たに取り組むこととなり、その成果を二番目の単著として2007年に上梓することができました。

同窓会との直接的な関わりは当初大きくなかったのですが、2013年に久野国夫教授（当時）から事務局長の任を引継ぎ、都合8年間同窓会活動に携わることになりました。池田弘一第10代会長、そして貫正義現会長のもと、同窓会関係の皆様の御協力で何とか務めることができました。とはいえ、財政問題という大きな課題を残したまま、大坪稔現事務局長へバトンタッチせざるを得なかったのは心残りではありません。

伊都キャンパスが完成し、2017年から引越しの準備が始まりました。その間キャンパス移転準備委員の命を受け、研究室や教室等の引越し手続きで奔走することとなります。移転が無事完了し、新しい環境での教育・研究が始まった矢先に新型コロナウイルス感染症の蔓延が世界を襲いました。2020年度と2021年度は、殆どの授業と会議がオンラインとなり、大学生活は一変しました。キャンパスで直接学ぶことのできない学生諸君には本当に気の毒としか言いようがありません。私自身も九大最後の2年間をこうした形で終えることになろうとは全く想像もしていませんでした。それでも、やがてはコロナ禍も終息し、皆がキャンパスに集い学ぶことができるようになるかと信じているところです。

間もなく経済学部は100周年、同窓会は50周年を迎えます。今後は私も一同窓生として学部や同窓会に恩返ししていきたいと考えています。西洋経済史初代教授の湯村武人先生、二代教授の森本芳樹先生、三代教授の田北廣道先生は残念ながら皆故人となりました。私が九大を「卒業」するにふさわしいかどうか、お伺いすることは叶わなくなりましたが、あちらでお目にかかった際改めて薫陶を受けることとし、これまでお世話になったすべての方々に感謝の意を込めつつ、ひとまずここで「卒業」としたいと思えます。

九大45年間の思い出



経済学研究院教授

深川 博史氏

[専門分野] 国際農業政策
1982(昭和57)年卒
1984(昭和59)年博士入

定年まで1年を残して、九州大学を早期退職することになりました。1977年に六本松の門をくぐって以来、学生・教員時代の45年間、九大には世話になりました。入学当時のL1-11組の樋口君とは今でも交流があり、彼が呼びかけた食事会で、福迫君、為水君、寺本君、寺嶋君と再会できました。

さて、六本松から無事進学した後は、箱崎で都留大治郎先生のゼミに入り、都留先生の薫陶を受けました。お人柄は軽妙洒脱で座談の名手でした。先生は学問を超えて、文人・書き手であることを大切にされていました。聞き上手になりなさいとも言われました。大学院に入ってから時は、薬院六つ角にあった木賊（とくさ）に連れて行って頂きました。カウンター7席程の狭い店で、中橋興先生など常連の方々と楽しい話題に会話が弾みました。毎年正月には、野間大池の都留先生宅で同僚・友人を招いての親睦会がありました。数十人の参会者は、大学・行政関係の偉い方が多かったのですが、年齢・職位に関係なく私のような学生にも対等に接して頂きました。そういう人柄の方々が都留先生の周りに集まっていたのだと思います。

都留先生が退職されて後、大学院の途中から宮川謙三先生の指導を受けました。宮川先生の指導は大変厳しく、農業理論の基礎を叩き込まれました。その後、九大に就職して長く務められたのは、この時



ご退職をお祝いする会（2022.3.4）

の宮川先生の指導があったからだと思っています。助手を経て1988年に六本松に赴任する前に、宮川先生から、「君も九大の教員になると大変だね」と言われました。最初は、その言葉を理解できませんでしたが、赴任後しばらくして、その意味を知らされることになりました。

九大教員は、研究業績を出さねばならないことへの圧力も強いのですが、優秀な学生がおり、授業の際に無言の圧力を感じることがあります。赴任当初は、教養部の教師として経済学を講義しました。黒板に板書していると、矢のような視線を背中に感じたのを憶えています。授業終了後に、板書した再生産表式を消していると「経済学は体系的な学問ですね」と学生が話しかけてきました。医学部の学生でした。短い会話でしたが、これは手を抜けないぞと感じました。それから、講義準備ノートの作成には、より時間をかけるようになりました。九大教員は、矢のような鋭い視線に支えられて水準を維持しているのだと思います。

教養部の解体とともに、1994年に経済学部の教員になりました。自由な雰囲気な教養部に比べて、経済学部の先生方は偉そうでした。伝統を背負っている風で、私も、農業政策講座の伝統を意識しました。九大経済の農政講座は、戦前の帝大時代に設置され、初代の田中定教授の農村調査から自小作前進論が生まれていました。田中定先生は1940年頃に、佐賀県平坦部農村の調査と分析を通じて、「自小作」という農民階層の動きを検出しました。当時は、農民層分解を巡る論争が盛んで、特定地域の農村調査を通じて、日本の農民階層の動きを解明した自小作前進論は画期的なものでした。都留・宮川先生とともに、白金の田中先生宅を訪ねたことがあり、直接に田中先生から話を聞いて緊張したのを憶えています。

私は韓国農村の調査を進めていましたが、農地の所有構造や村落の特徴に日本との相違が大きく、韓

国独自の視点が必要と考えていました。当時の韓国は経済開発の成功事例として注目され、開発経済学者が多く韓国研究に参入していましたが、韓国の農業構造に注目する人はあまりいませんでした。韓国経済が先進国レベルまで成長すると、ほとんどの開発経済学者は韓国への興味を失い、研究対象を中国や東南アジアへと変えていきました。農業経済学の分野でも韓国農業の研究者は少数でしたが、2000年頃に韓国が、農産物市場の開放を迫られると、同じ市場開放問題を抱える日本の農業経済学界で韓国への関心が高まりました。ちょうど私が『市場開放下の韓国農業』という書物を出版したこともあり、農水省の農林水産政策研究所など、あちこちから講演や寄稿の依頼が来るようになりました。

その後は、文科省の科学技術振興機構で審査の仕事をしたことをきっかけに、畑違いでしたが、技術移転について研究しました。韓国企業は、海外の技術者をスカウトして日本を追撃していました。韓国企業で働く日本の技術者へのインタビューを重ね、論文「21世紀アジアのお雇い外国人」を書きました。

また最近、コロナで海外調査ができなくなり、国内で可能な海外研究として、農業経営の外国人雇用の調査を進めています。第1弾の研究結果『日韓における外国人労働者の受入れ：制度改革と農業分野の対応』共編著（九州大学出版会）は6月に刊行予定です。人口減少と高齢化で労働力不足に直面する農村は、外国人労働者の受入れで、規模拡大と農地利用が進み、耕作放棄地が減少して、一部地域では息を吹き返しつつあります。次の職場がある熊本県は、農業分野の技能実習生数が全国2位ですので、落ち着きましたら、農村調査に出かけようと考えています。

九大在職中は、みなさま方に親切にして頂き、また、困ったときには相談に乗り、助けても頂き、よき同僚、優秀な同僚に恵まれて、心地よく過ごすことが出来ました。感謝申し上げます。

4月からの勤務は、東海大学の熊本キャンパスです。熊本に新たに開設される文理融合学部の経営学科に、国際農業経済の研究室を作って頂きました。

退職後に九大の附属図書館を利用する際には、経済学研究院の方を訪ねるかもしれません。見かけたら声をかけて下さい。それでは、皆様、長い間、ありがとうございました。

福岡・東京・関西、それぞれの地の同窓会において厚遇を頂きました。
心より感謝申し上げます。



九州大学名誉教授・経済学 **福留 久大**

Hisao Fukudome

Professor Emeritus of Political Economy at Kyushu University

〒810-0014 福岡市中央区平尾5-22-31-501 E-mail hisamiya0402@yahoo.co.jp

九州大学経済学部同窓会歴代会長

- 初代 田中 定氏（昭和50年10月4日～）（3期8年）
 第2代 森下 弘氏（昭和58年2月4日～）（1期3年）
 第3代 岡野 正實氏（昭和61年10月24日～）（2期6年）
 第4代 谷川 大介氏（平成4年10月9日～）（1期1年）
 第5代 渡邊 彦士氏（平成5年7月7日～）（1期3年）
 第6代 福岡 道生氏（平成8年10月11日～）（1期3年）
 第7代 吉田 清治氏（平成12年2月10日～）（1期2年）
 第8代 森山 靖章氏（平成14年5月31日～）（1期3年）
 第9代 平山 良明氏（平成17年7月7日～）（1期3年）
 第10代 池田 弘一氏（平成20年7月7日～）（2期6年）
 第11代 貫 正義氏（平成26年7月7日～）

同窓会からのお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（3年間分4,500円）になっております。

終身会費は一括払いと分割払いとがあります。ご都合のつくときにご協力よろしくをお願い致します。

- | | | |
|-------|------|-----------------------------|
| ①終身会費 | 一括 | 45,000円 |
| ② | 3分割 | 15,000円×3回（1.5年間で納入完了） |
| ③ | 6分割 | 7,500円×6回（3年間で納入完了） |
| ④普通会費 | 3年間分 | 4,500円ずつ（11回・49,500円の納入で完了） |

◎平成18年（2006年）3月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。

◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割払い、または一括払いで払い込まれた場合も、終身会員に移行となります。

◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に3回又は6回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。

◎会費納入や住所変更等のデータは、令和4年3月31日現在で集計しました。

住所など身の事情に変更が生じましたら、すみやかに下記同窓会事務局までご連絡ください。



九州大学経済学部同窓会事務局

（開室：平日の月・火・木・金 10時～17時）

〒819-0395 福岡市西区元岡744 九州大学経済学部内

TEL 092-802-5561 / FAX 092-802-5560 / E-mail : dosokai@econ.kyushu-u.ac.jp

経済学部同窓会ホームページ <http://koyukai.kyushu-u.ac.jp/alumni/4>

橋本純夫様、都野弥生様よりご寄付を頂きました。誠にありがとうございました。

経済学部同窓会の財政は変わらず厳しい状況です。

是非共、ご寄付、協賛広告のご協力をお願い申し上げます。

お申し込み、お問い合わせは、上記事務局までご連絡ください。